
SECOND GAME 漆黒の狼、白き月

となりの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SECOND GAME 漆黒の狼、白き月

【Nコード】

N1872W

【作者名】

となりの

【あらすじ】

江戸川コナンにとって、それは両極に位置する存在だった。遠く離れていて、決して交錯することのない、別個のものとして。しかし舞台の上で役者は揃い、奇異な事態が動き出す――。

1. 1 (前書き)

暴力的描写がそこそこ長いのでご注意ください。

——脳髓を突き抜ける、痛み。

「——ッ……」

神経の糸を、鋭利なナイフで縦に裂かれていくような。

血管を駆け抜け全身へと一気に伝播するようなそれに、仰け反るように総毛立って、一瞬後、声帯の振動を伴った息を——荒く吐き出していた。

自己を保とうとする防衛本能が喉から声を上げさせることに、彼は制止をかけ損ねた。

それは、悲痛に上ずり恐怖に濡れたものなどではなく、苦痛をやり過ぎするための反射に近かった。言うなれば奥歯を噛みしめる行為に、色が付いた程度のものに過ぎず。現に、すぐに奥歯を噛んでかみ殺した残りの声は、喉の奥へと飲み込んでいるのだ。

だがそれでも、ここまで聞くことの無かった悲鳴らしき声をようやく耳にした男は、感心したような声を零し口の端を上げる。

「随分と甘く心地いい声で鳴くじゃねえか……なるほどな——さすが、万人を惑わせる七色の声の使い手。……地声も実に蠱惑的なものだ。——どれ……」

と、引きつったような震えを起こす体を押さえつけながら、その男——ジンは、指へさらに力を籠めた。

しかし、声を擲掄したせい……上乗せされた刺激にも、もう今し方のような声は上がらない。

押し殺された咽から漏れる掠れた吐息を聴いて、ジンは目を細める。”期待通りの反応”を返してくる様がまるで子供だと、そう思

う。

火照る体が纏う青いシャツに手を掛ける。

驚掴みにした手でその裾をスラックスから粗雑に引き抜くと、ジンは、左右にそれを、力任せに無理矢理開いた。

ぶつぶつとくぐもった音で引きちぎられたボタンが、弾け飛んで辺りに散らばる。その煽るようなやりかたに刃向かうように、組み敷いた相手が額に汗を滲ませたままジンを強く睨み上げる。

為す術もなく蹂躪されている身でありながら、その瞳はなお理性を宿し冷涼な闘志を失わずに。

ジンの手は、はだけさせたシャツから離れ、再び、組み敷いた相手の大腿部を掴んだ。

「……………」

そして、一瞬眉を顰めただけで表情を動かさない相手を見下ろして、くつくつと嗤いを零す。

ポーカーフェイスが、今ここでなんの役に立つというのだ。

滑稽だ——だが、悪くない。

ジンは固く握りしめていた指の力を抜くと、手をどかしたその場所に、今度は黒いスラックスに包まれた膝を置いた。僅かに目を見開いた空色の双眸。それを視線で捕らえたまま——そのまま押しつぶすように体重を掛ける。

そうすれば、くんつ、と背筋に緊張が走って、浮いた背が緩く弓なりにしなる。堪りかねたように痙攣を起こして、細い身体が震える。

じわり……、と、褐色に乾燥していた元は白かったスラックスへ、朱の色が折重なって広がっていく。生暖かい濡れた感触がこちらの膝にも及ぶ。

踏みつける膝を揺すり、体重のままそこをなじってやると、ジンの思うとおりに強ばった体が跳ねて、押し殺される悲鳴の代わりに鎖の擦れる音が部屋に響いた。

それをつけながらジンは手を伸ばし——視線の先で揺れている顎

を、耳の裏へ指を差し込むようにして掌中に捕らえた。仰け反つてしまい観察できなくなっていた顔を自分へと向け直す。

汗の滲む額に、まばらに張り付いている黒髪。僅かに顰められた眉根の辺りが震えていた。白い蛍光灯の明かりに晒されているせいも手伝って、その顔色が紙のように白い。

「……先刻、手負いを力ずくで屈服させることに、矜持が咎めないのかとオレに訊いたな？」

ジンは、掌中の滑らかな輪郭を愉しむように親指の腹を動かしながら、酷薄な笑みを浮かべる。

「おまえの、その瞳のどこに弱者の風がある？　なあ、怪盗キッド」

「……………」

そう。うつすらと瞼を開けるその青い双眸は、やはり、ジンを確然と睨み返している。

——国際手配ナンバー1412——……通称・怪盗キッド。

そこは、6畳ほどの殺風景な部屋だった。牢屋と言うべき、監禁部屋である。

明かり取りの窓一つなく、粗雑な打ちっ放しのコンクリートで囲まれた箱。

壁に、さび付いた鉄製の扉が一つ。あとは高い天井に取り付けられた外から操作できる一本の蛍光灯と監視カメラ及び集音機だけで、それ以外には、装飾も家具の一つも在りはしない。

いや、お世辞にも装飾とは言えないが、ぽつんと、一つだけ備え付けられたものがあつた。

部屋の隅、床のコンクリートに埋め込まれた、無骨な鉄の取っ手

のような物。太い鉄筋をアーチ状にして床に埋め込んである。

——そこに鎖を掛けられて、キッド……黒羽快斗は拘束され、蹂躪されていた。

床に倒された快斗は、頭上で両手首を手枷よって纏め上げられ、それを床に固定され、体は乗り上げてくる男によって封じられていた。

シルクハットやモノクル、ジャケットはこの部屋で意識を取り戻した時点ですでに取り上げられていて見あたらず、上は青いシャツ、下は白いスラックスで、靴はなく素足だった。

もつとも、シャツは先程無理矢理はだけられ、曝された肌が冷氣に粟立っている。それは空気の温度より、男の気配から滲む温度のためだった。

脳幹を直接殴られるような波打つ痛みは、男が膝で踏み付ける左大腿部からもたらされる。そこには、拳銃で数時間前に撃たれた真新しい銃創がある。痺れて感覚が遠いのに、痛覚だけが乖離したように鮮明だった。

このまま翻られて殺されるのだろうか。冷静にその可能性を考える。覆い被さる男は、薄ぼんやりした白々しい蛍光灯の逆光でシルエットになっているのに、冷酷な色の双眸と、酷薄な口元だけはいやにはつきりと浮かび上がって見えた。男の纏う、温度を奪うような空気——それが熱い快斗の体に刺さり、熱いのか寒いのか判然としない汗を滲ませていた。

不意に、ぐい、と骨張った指に顎の向きを補正され、快斗は熱い吐息と共に、いつの間にか落ちていた瞼を薄く上げた。

黒ずくめの男——ジンが、だがな、と言って、快斗の顔を覗き込む。

「お前が言う手負いよりも、戦う意志のない負け犬を相手にするのは、矜持がどうこうよりも、詰まらなくて俺はご免だ」

そう言いながら、ジンは快斗の顎にかけた筋張った指をゆっくり

と下げていく。その指は首にかかり、鎖骨を過ぎ、胸へ。心臓の上へひたりと置かれる。

「どうだ？ 泣きすぎて俺に屈服してみるか？ そうしたら、即座に俺は興醒めして、きつとお前を解放してやるぞ」

「……………」

（……………なんだ、その条件）

快斗は、ポーカーフェイスを纏いながらも、ジンの提示した言葉を頭で反芻して訝しむ。

数十分前、部屋に入ってきたこの男は一つだけ問いを口にした。それを否定で答えたこちらの言葉を信じてもない風だったのだから、拷問で口を割らせるならそれであるはずなのだが……。

胸に置かれたジンの手が、僅かな沈黙を落とす快斗の肌からひんやりと熱を奪う。

発熱に冒される身体にそれは気持ちいいはずであるのに、その手は、触れられて平静でいられる類のものでは到底なかった。

心臓の上に置かれた手が、いとも容易く自分の命を絶てることを知っている。だからこそ、快斗は一片の揺るぎも見せず返す。

「……………断る」

はつきりとした発声でジンの目を見てそう答えを返した。

その自ら痛めつけられる選択をとるような、愚ともいえる返答を聞いたジンが、クツと咽を鳴らす。そしてその口の端が上がり、二イと濃厚に——嗤った。

快斗がその唇の描く残忍な形に目を奪われた一瞬の間に、胸に置かれていた手が素早く滑り、右肩のシャツの下へと潜り込んでいた。理解するより早く、爪を立てて、力任せにそこを押さえ込まれる。快斗は一瞬息をのんだ。息が止まった、ともいえる。

「——！ ツアア……………」

「——正解だ」

撥ねる体を組み敷いて、血でぬめり殊更熱いその箇所へ指を挟り込みながら、ジンは睦言のように囁く。

「お前がそんな詰まらない選択をとったなら、確かに俺はお前を解放しただろうよ。……死という安らぎを与えてやってな」

「……………」

引きつった呼吸が、不規則にあえぎ混じりで快斗の胸を震わせる。痛みを押し殺すように、快斗は後頭部を床へ押しつけきつく奥歯を噛む。

……視界が昏い。その中で、無意識で暴れる腕が動きを封じられて立てる鎖の擦れる音——それに自分の呼吸音——耳の中で鳴る潮騒のような音——それに混じって、ぬちゃぬちゃと粘りけのある嫌な湿った音が耳へ這い入ってくる。

ジンが、二つめの銃創を弄び始めたのだ。左脚同様、右肩もまた、銃弾によって挟まれていた。

「やはり、伊達に若い身空で裏社会に足を踏み入れて、生きながらえて来たわけじゃ無いようだな。いい勘だ……悪くねえ」

淡々として部屋へ短く反響する声。その主によって、片手の指だけで植え付けられる苦痛に、全身が痺れていく。挟り込まれる指に、細胞が悲鳴を上げる。

「は……ア……………」

世界が、狭窄されていく。

痛みの区別が無くなり、ただ、苦しいという渦になる。その渦に飲み込まれまいと、喘ぐようにして唯一制御下にあるはずの呼吸を整えようとするが、うまくいかない。

——熱い。体が熱かった。酸素が足りない。息を吸い込むけれど、熱を逃がしたくて、直ぐさま吐き出す。そうやって、浅い呼吸を繰り返す。

次第に、脳の中心がじいんと遠く痺れて、思考も視界も、不明瞭になっていく。

……その中で乾いた声が平坦に響いた。

「もう一度訊くぞ、怪盗キッド。あのとき、誰かもう一人あの場に

いたな？ …… 誰だ。 — …… 答える」

「

…… 考える余地もない。狭窄する世界の中、絶対的な響きで発せられたその声に対して快斗は答えを述べる。

「誰かなんていなかった…… オレ一人だったって…… いったんだろ」

怪盗の覆らない答えを聞いたジンは、胸ポケットから小さなオレンジのアンプルを取り出した。

注射器になっているそのカバーを外し、ぐつたりともう半ば意識を失っている怪盗の、細い首筋に針を突き立てる。注入し終わるとそれを投げ捨て、ジンは立ち上がった。

「

しかし、ふと、思案するように動きを止める。

—— 返し掛けた踵を戻す。ジンは力なく投げ出される怪盗の肢体を眺め降ろしながら、己のコートへ手を掛けた。

ウォツカは、その扉の傍らに凭れてもう1時間以上座り込んでいた。

自分の兄貴分は、よほどあのコソ泥のことが気に入ったらしい。

本来、尋問という作業を兄貴——ジンはあまり好まない。

だから、おそらく10分もしない内に声がかかって交代を言いつけられるのだらうと、そう考えて待機を続けていたのだが——。

いくら待っても、ジンはコソ泥をウォツカに与えようとはしなかったのだ。

『退屈だ』という理由で、常ならば投げ出す作業をジンに続けさせ……なおかつ、彼が持つ嗜虐的嗜好を十二分に引き出す素養が、どうやらあのコソ泥にはあるらしかった。まったくもって、羨ましくもない素養だが。

それを理解したウォツカは、ドアの脇で座り込み、新しく支給された拳銃の調整を行うことにした。手に馴染んでいたものを失ったことを改めて悔やみながら丁寧に手入れをしたが、しかしそれも30分で終わり。後はただ、煙草をふかしながら室内の様子を耳で追っていたのである。

物音は、多くない。最も頻繁に聞こえるのは鎖の擦れる音で、次に低くくぐもった衝撃音、そのほかは時折コンクリートで体をずるような音があるだけだ。

それでも、ジン特有の触れるだけで肌が粟立つような温度のない気配が、濃厚に部屋からは滲み出ていた。

包まれているだけで暴力になりうるそれを間近で一身に浴びているはずのコソ泥は、苦痛に声を上げることはあっても、錯乱して喚くこともなく、また、ジンに慈悲を請うこともしなかった。少な

らずそのことはウオツカを感嘆させたが、同時に、それは全てジンの思惑通りの展開のようにも感じられた。隷属しようとしていないコソ泥に対し、苛立ちも怒りもなく、むしろジンはそれを愉しんでいる……期待通りの上等な反応を返すおもちゃを、ためつすがめつ、もてあそんでいるような。

ジンはコソ泥に苦痛の声を上げさせながら、珍しく戯れのような言葉を並べ……そして定期的に問いを口にした。

『おい、怪盗キッド。素直に言う気になったか』

『……』

『そうこなくちな——』

『……うく……ああ!』

『……っは……、』

『答える怪盗キッド。一緒にいたのは誰だ』

『おれいがい……だれも…… アあ……あっ……!』

『……か、はっ——』

『……』

——扉の向こうで、もう幾度目になるかわからない問いが、また繰り返される。

『これが最後だ。——言え。一緒にいた奴は誰だ』

『——』

『……』

『——だれも……、いな——……』

『……………』

『……いい答えだ——』

「ウオツカ」

「——へ、ヘイ！ 兄貴っ」

室内から向けられた、名を呼ぶ声——それに一拍遅れて反応したウオツカは、慌てて立ち上がった。

軋む鉄扉を内側へと押し開ける。そしてその先にコートを纏っていない兄貴分の姿を見留め、ウオツカは僅かに目を瞠った。その足下のコソ泥は意識を失っているのか微動だにしない。

ウオツカは殺風景な部屋へ踏み入り、コートを拾い上げるジン……そして、床へ転がって体を弛緩させているコソ泥の元へ歩み寄った。

「後はお前に任せる。適当に処置して、身なりを整えておけ」

「？ 身なり……ですかい？ それってどういう……」

疑問の声を上げかけたウオツカに、しかしジンはコートををはたき、袖を通してながら淡々と告げる。

「おそらくじきに移動だ。奴が来たときに一目見て分かる痕跡は無い方が都合がいい。ここに運び込まれた時と同じ見た目にしておけ」

「？ へ、へい」

「どうした」

「あ……いえ、……さすがに手加減はしてやっただなと思いやして。吐かせるって兄貴がここへ向かったときには、ああ、やっぱり殺しちまうつもりなのかなって思ったもんですから……」

——そう言いながら、自分の発言で改めて腑に落ちないものを強く感じて、ウオツカは、外傷の増えた形跡が見あたらないコソ泥の体を首を捻って見下ろした。

そう、コソ泥の体には、新しい傷が見あたらない。

肩と脚の銃創は元からのものだし、腹部の青痣にも心当たりがある。目立つのはそれくらいで、あとは五体満足、皮膚を削いだわけでも、爪を剥いだわけでもない。……そういえば、その手の器具をジンは何も持ち込まなかったのだとウオツカは気づいた。

そもそも身なりを整えておくとジンはいったが、コソ泥の姿にはそれほど乱れた様子も見あたらないのである。

白いスラックスはベルトがない——牢につなぐ以前に取り上げたからだ——ものの、きちんと着用されているし、青いシャツは前が無理矢理開かれているが、それだけで、破けていることもない。スラリとしたしなやかな四肢は、着衣によって覆われている。肩と脚の処置をしてシャツの前をどうにかすれば、それで言いつけられた仕事は終わってしまいそうである。

「……えっと、結局、しゃべったんですかい？ 例のヤツのこと……吐かせようとしてたんですよね」

なんとなく話題をずらしてウオツカが台詞を振ると、淡々とした声がそれに返る。

「……吐いたと思うか？」

「いえ、最後まで口を割らなかつたような風に……やりとりが聞こえてたんですが」

「その通りだ。……わかっている事を訊くんじゃねえ」

「——す、すいやせん……」

呆れたような声音に萎縮して、ウォツカは逃げるように自分の仕事へ向かった。

兄貴は難しい人だ。気むずかしいだけでなく、頭が切れて思慮深い。詮索など無理な話で、自分はただ付き従って仕事をこなせばいいのだ。

そう気持ちを切り替えてコンクリートの床へ膝をつき、巨軀を屈み込ませ、手を伸ばす。

そうしてコソ泥の体を仰向けに寝かせ直そうとしたウォツカは、

——ふと、触れた体の温度に目を瞠った。

「……！」

担いで運び込んだ時よりも遙かに発熱している体——それに驚く。銃による傷からいずれは発熱が予想されたが、今ウォツカが掌に感じている熱は、その範疇を明らかに超えている。

銃傷から遠い箇所を確かめても、燃えるように熱く。肌が蒼白だったから、逆にもっと低い体温を想定していたという面もあるが、これは——。

「——……」

——手加減をした……だって？

ウォツカは、まるで甘かった自分の認識をそこで破り捨てた。

「——海老で鯛を釣った……と思っではいたが。……それ以上の獲物かもしれないな、コイツは」

冷淡な中にどこか興味深そうな色を含んで告げる声。

斜め後ろから降ってきたそれを振り仰ぐと、その主たるジンは黒いコートを着込み、片手で前のボタンを留めながら口の端を持ち上げていた。長い前髪が目元を覆っているが、刃のような冷酷な視線がコソ泥の上に注がれているとわかる。

「こいつ自身も、その周囲も……探ればもっと面白いものが出てき

そうじゃねえか。——……思いもよらず、あの女狐が釣れたみてえにな」

想像外の価値を知ったからには、活用しない手はない……そう言うってジンは目を見開き音もなく哄笑する。

「わかるか、ウォツカ。さしあたっては、あの目障りな女狐から化けの皮を剥ぐための釣り餌になってもらうんだよ——……」

この……怪盗キッドにな」

それは、闇色の鴉と地に落ちた白い鳩か……漆黒狼とその眼前に躍り出た白い仔山羊か。

K I D——『仔山羊』——という供物の代名詞を名とする怪盗は、狼の巣へ囚われていた。

銀のたてがみを持つ漆黒の狼にとって——……あるいは。その存在は、真円に満ちた白い月——そのものだったのかもしれない。

飢餓を呼び起こす、狂気の増幅媒体たる——。

剥いた牙で白を赤に染め濡らし——、漆黒の狼は、地に落としたそれを愉しげに眺めていた。

それが見知らぬ誰かであっても、見知った誰かであっても。目の前で見殺しにするなど、出来るはずがない。

その時、工藤新一こと江戸川コナンが動いた理由と——黒羽快斗こと怪盗キッドが動いた理由は、全くと言っていいほど同じだった。だが、しかし、やっぱりあの怪盗の方はどうしようもなくハートフルで馬鹿だと江戸川コナンは思わずにいらなかった。怒りにも似た思いで、心中、あの柔らかい白色を罵る。

砂埃にまみれた床に残るいくつもの足跡を通り抜けて、暗闇の中でも鮮烈に心臓を貫くような紅が散る場所へ膝をつく。

ざらりと、と、砂混じりのそれを掴み、振り上げた拳を強く床に打ち付けた。

（どうする——！？）

瞬間的に自問したそれは、行うか、行わないか、の迷いではなかった。

どう行うか。それに尽きる。行わない選択はありえなかった。

江戸川コナンは、迷った。激しく迷って思考を高速回転させる。猶予はあまりなかった、もう五秒迷えば手遅れになるが、良い案が拾い上げられないのだ。

だが、確かな未来のビジョンをつかみ取れないままに、腕はもう

上がっていた。

手遅れになるまで、あと三秒。

幾つもの選択肢の中では一番長く未来を描けるだろう、その頼りないコヨリを掴むことを心に決めて、コナンは、狙いをすまし心を研いだ。

そして、あと二秒――

（――な……！？）

……と、いうところで。タイムオーバーのホイッスルは無情にもそこで唐突に鳴り響いてしまったのだ。

高らかに響くそれではなかった。パシュツと気が抜けるような発射音。

それは、こちらのゲームを乗っ取り、別人のステージが始まりを告げる音でもあった。

飛来したそれが黒服の男の銃を弾き飛ばす様子を最後まで見届けず、それよりも目はその姿を探した。

首を振っただけでいとも容易くその姿を見つける。同じタイミン
グで相手もこちらを見返したことから、相手はこちらに気付いていて、かつ、互いの姿が視認出来る位置をわざとつたのだと分かる。
手振り、唇の動きで、相手が自分を逃がすつもりなのだと分かるが、コナンは大人しくそれに従うほど薄情で無責任でもなく、また、感情的に反発して相手の厚意を無辜にするほど愚かでもなかった。

つまり、成り行きを見守らざるを得なくなったのだ。発射寸前まで構えていた腕の麻酔銃を控える。

その目の前でショーは続く。

何者だ、という誰何の声に、その人物は迷い無く、身を隠していた柱陰から出た。そう、その白い姿で凜然と佇む。

月下の奇術師——怪盗キッド。

その白が相対するのは、対照的な黒服の男二人組。一人はエラの張った顔にサングラスを掛けた体格の良いスーツ姿の男で、もう一人は、長身で、銀色の長髪と酷薄そうな色素の薄い鋭い目が特徴的なコート姿の男であった。

両者とも屈強そうな体に纏うスーツやコートは漆黒で統一され、同色の中折れ帽を被っている。

構成員が決まって喪服のような漆黒の衣装を纏うことから、一部の人間に、通称で『黒づくめの組織』と呼称される闇組織の男たちである。

とりわけそれは、コナンの因縁の相手——ジンとウォツカの二人組であった。

そして、場にはもう一人の男がいた。

ダークグレーのスーツ姿をしたその男は、黒の組織の人間では無い。とは言え、犯罪組織の取引相手であり、黒の連中と大差のない同じ穴の貉であることは想像に難くなかった。

……そして、この男はたった今黒づくめの男の手によって死を与えられる寸前だった。つまり、この瞬間、白いハートフルな怪盗によって彼は命を救われたのだ。

「この銃に籠められた弾——侮らない方が懸命だぜ。貫く威力は無いが、切り裂くことに関しちゃ、ナイフなんかとは比べものになら

ないくらい切れる。そつちのエラの張った男ののど笛はもちろん、あんたの首筋だって、コートの襟やマフラーごと豆腐みたいに切り裂いて頸動脈を切断するぜ。あんたのその『S & amp; W M 2 8』の二倍の発射速度がある。連射も言わずもがな。で、五倍の装弾数だ」

チャカ、と挑発するように銃を構え直して、怪盗が斜に男たちと対峙する。

「どうする、撃ち合ってみるか？」

「……これは思わぬ闖入者が現れて、また大きな口を叩いたもんだ」銃を弾き飛ばされ及び腰になりかけているウォツカとは一線を画す威圧のある風体で、ジンがカツリと靴底を鳴らせた。その手に構えられたリボルバーは、ひたりと怪盗の眉間に照準を定めている。

「夜目の利く鳩ごときが身の程を知らずにしゃしゃり出てくるとは、よほど死に急ぎたいようだな」

「まさか。オレは平和主義者だから、他人の命も自分の命も大事にするぜ。ただ、闇夜に乗じて人の命を狩るような——そんな凶悪な鴉にまで情を掛けてやるほど、オレもお人好しじゃ無いが」

「……お前、こいつを何者だと思っているんだ？」

つまらなそうに鼻を鳴らして、ジンが、視線を怪盗から外さないまま顎でスーツの男を示す。

「取引、見ていたんだろう。その上で、これが善良な一般市民だと思ったか？ こいつはオレらと同じさ。拳銃を持っていないともない。こいつを今日生かせば、明日こいつの決済一つで善良な市民が不条理に死ぬかも知れねえんだぜ？ ……お前は何を望むんだ？ ええ？ 怪盗キッド」

「そいつが明日人を殺すかも知れないから今ここで殺して良いなんて、暴論にもほどがあるんじゃないか？ 第一、どんな理屈があつたとしても、お前らの人を人とも思わないやり口に賛同できそうにはない。オレはオレの思う最善手を常に取りただけだ。心配してもらわなくても、そいつの首にも縄を付けて警察に送りつけてやるさ。」

だがその前に、まずはお前からだぜ——鴉諸君」

冷涼としたキッドの声が、殺風景な空間に反響する。

その残滓が消えると、一気に張りつめた空気の濃度が上がった気がした。

重圧な空気の中、再び口を開いたのはキッドだった。

「おい、あんた。死にたくなかったら、とっとと逃げるんだな。……それで、刑務所暮らしの為の身辺整理でもしておけ」

その言葉に、ハッとしたように男が身じろいで、じりじりと後ずさり出す。

舌打ちをしたジンが、姿勢を動かさぬままに後方へ怒鳴る。

「ウオツカ、何ボケツとしてやがる……！ とっとと銃を拾ってそいつを殺せ！」

「で、でも兄貴……！」

怯むようにジンとキッドを見比べる気配に、ジンが吐き捨てるように言う。

「こいつは殺しをしない甘っちょろい優男だ。お前を撃つたとしても、致命傷なんて負わせやしねえ。それに……ヤツがお前を撃つた次の瞬間には、オレのマグナムがヤツの心臓を撃ち抜いてる。びくつく理由なんざねえ、さっさと——」

ジンは言葉途中で、絶句した。

その目が捉えていたのは無音で落下してきた鉛色の分銅型の固まりだった。怪盗は動いていない。視線は怪盗から逸らせていない。だが視界の端で、それは確かに今にも床で爆ぜる寸前だった。

そして、その僅かな気の逸らせと動揺は、怪盗に十分な好機を与えたのだった。

暗闇が、激しい閃光に灼かれる。

「ちいいい!!」

ジンは苛立たしげに目を押さえて、腰を僅かに低くして構えを取った。

先ほどまで手にあつた拳銃は、怪盗に撃たれて弾き飛ばされている。

「くっ……」

素早く予備の銃を引き抜こうと懷に手を入れる——のと同時に、にわかに肉薄してくる気配を察知したジンは、無理矢理目をこじ開けるとそちらへ向かつて渾身の蹴りを繰り出した。

「——っ！」

その拳動に、気配が揺らぐ。

視界を奪われているはずのジンから繰り出された、あまりにも正確な鋭い蹴り——意表を突かれた相手——怪盗はそれに対応しきれず、何とか腕でガードを入れるものの受け止めた蹴りの勢いのままに吹き飛ばされた。

怪盗が手にしていたらしいスプレー缶が、音を立ててあさつての方向へ弾け跳ぶ。そちらを見もせず足を振り抜くジンは、麻醉スプレーだったのだらうと予測した。

怪盗が、宣言通り鋭利なカードで首筋を狙ってきたなら、二度は殺られていたかもしれないのに。

(……甘いな)

所詮アレははったり——ジンが怪盗の銃口よりも閃光弾の対処を優先して素早く目を閉じたのも、怪盗の甘さのある意味信用したおかげと言える。その結果、目を殆ど灼かれずに済み、甘い手段しかとれない怪盗を迎え撃つことが出来たのだ。

ジンは、懷から銃を引き抜いていた。

だが怪盗も弾き飛ばされる途中で煙幕を撒き、その中であつて、すぐさま行動に出ている。靴音はない。だが、煙の動きを見て、ジンは銃口を移動させる。

どさり、と重いものが床に落ちる音が聞こえた。

（ウォツカが倒されたか）

推測をしながらも、ジンは動じもせず冷酷な瞳を研ぎ澄ませている。獲物を追つて、銃口が揺れる。

煙幕は既に大きく広がって、ジンも取り込み、フロアへ広がっている。薄ら白い暗闇の中、靴音が一對響いて遠ざかっていく。そこへ向けてジンは銃弾を撃ち込んだ。だが、フロアの不規則な反響が邪魔をするのか——それとも足音を立てていない方が、立てている方を上手く誘導しているのか——恐らくその両因に阻まれ、手応えはない。

不意に、ゴウンと重いものが動きを止める音、それから扉がスライドするような音が微かに響く。

（エレベーター！）

ジンは咄嗟に目をこらして明かりを探し、見つけれないのを悟ると、次に己の周囲を確かめた。濃い煙幕だが己の周囲五メートルほどであれば、見渡せた。位置を、把握する。

「……………」

柱等の位置からして、自分は初め立っていた場所から数歩も動いていない。ジンはすうっと、腕を水平に持ち上げた。

記憶しているフロアの配置を脳裏に描きながら、それを視界と重ね合わせる。

——見える。

エレベーターの位置が、煙幕に阻まれているはずのジンの視界には映って見えた。

酷薄に口の端を歪め、ジンは目を見開いて嗤った。

——ヤツの行動。恐らく、あの男だけをエレベーターに乗せ、己は足止めとしてフロアに残るはず。

——となれば、ヤツの位置は？

銃口が、すうっと、吸い寄せられるように一点で固定される。

パネルに手を掛け、扉の前で男にこの場を離れる指示を与える、純白に身を包んだその後ろ姿がジンには見えた。

拳銃の炸裂音がフロアをつんざき、ジンの目には白い衣装が赤く染まる様が幻視された。

鼓動に呼応して痛みが波のように押し寄せる。

「……………」

快斗は階下へ下っていくエレベーターの動作音を聞きながら、自分の赤く染まっていく肩を見た。手当をしている暇はない。

懐を探って、特殊弾をトランプ銃にセットする。思い通りに動かない手に、苦々しく眉を顰めた。

完全に油断していたところを、煙幕の向こうから撃たれた。予想以上の相手の能力の高さに慄然とするが、吞まれるわけにはいかなかった。お節介にしゃしゃり出て振り返りにされては、名探偵に呆れられてしまうだろう。

ぎしぎしと軋む身体を宥めるように、快斗はゆっくりと大きく息

を吐いた。背中が痛い。

快斗がこの日、江戸川コナンを見かけたのは偶然だった。小さな博物館に、予告を出す前の下調べをした帰り。思い掛けない場所で見かけた、見知った姿——それは小さな体に自分と渡り合える能力を隠し持つ名探偵だった。

それがただならぬ雰囲気で暗い夜道を、単身、人気のない区画へ駆けていくのを不審に思い、見過ごせずに後をつけた。

そして、様子を見ている内に成り行きで——その日は纏う予定の無かった白い衣装で黒服の男たちと事を構えることになってしまった。

悪人だからと言って、目の前で見殺しには出来ない。そういう性分だから仕方がない。

そして、同じ性分を持ち合わせ自分以上に向こう見ずな名探偵も、また見殺しには出来なかった。彼に任せるにはリスクが高すぎる状況であることは明らかだった。

絶望的と知っていて、それでも戦いを挑もうとする気高い魂に感銘すら覚えたから、お節介を焼くことに迷いはなかったし、後悔もなかった。

……ジンの、余裕はあれど慢心はない靴音が、一步步近づいてくる。快斗はもたれているエレベーターの扉から体を起こして、左手でトランプ銃を構えた。

背中を二カ所——それから、右肩を大きく挟むように撃たれた。背中を撃たれた分は、防弾チョッキのおかげで銃弾そのものは止められた。とは言え、受けた衝撃は馬鹿に出来たものではなく、折れてはいないだろうが、肋骨にはヒビが入っただろう。おかげで真っ直ぐに立つだけでつらい。

だが、深刻なのは右肩だ。擦過射創というよりは貫通射創と言って良いほどの決れ方で、神経は無事のようなが、筋が少しやられて

いてまともに腕を持ち上げられない。

後遺症の残るような損傷では無いが、右手は、この場ではもう使い物にならないだろう。

基本的に両利きである快斗だが、この怪我で、まともな交戦が出来るとはとても思えなかった。……とりわけ、あんな男が相手では。

（流石、名探偵の因縁の相手。ただ者じゃねーぜ、まったく）

取引相手のあの男はとりあえず逃がすことが出来た。黒服の奴らは二人組のみで、他の気配はなかったから、無事逃げおおせただろう。……近いうちにきつと悪事は露呈してやって、その点で逃がすつもりはないのだが。

近づいてくる足音を聞きながら、快斗は目を閉じた。距離を測る。最早、逃げ延びることを最優先で、どうにか離脱するしかない。

もちろん名探偵は置いていけない。

（名探偵……名探偵逃げたかな。——ぜってー逃げてねーだろーな、性格的に）

合流をして、離脱。快斗は意志を籠めた瞳を上げると、トリガーを引くのと同時に音もなく床を蹴って駆けだした。

——因縁……というもののだろう。闇取引に向かう黒ずくめの男たちを、何気なく見ていた車の窓の外に見つけるなんて偶然は。

因縁か、宿命とでも言うしかない。

小五郎の仕事の帰り、小五郎と、蘭と、三人でタクシーに乗っていた。時刻は、二十三時。郊外の依頼人宅から米花町への帰路の途中、川に架かる橋を渡ったところで、何気なく流れゆく景色をぼんやりと見ていたコナンは、川縁にある、一棟の廃ビルに目を止めた。姿が見えたのは一瞬だった。だが、見間違えなどしないと確信があった。廃ビルへと入っていく長身の男二人組。

全身の血が一気に沸騰するような感情を理性で抑え込み、コナンは慎重に数百メートル離れた場所で、タクシーを止めた。もちろんそれは褒められたような止め方ではなく、蘭と小五郎に理不尽な心配を強いることになるとわかっていたが、コナンは单身、廃ビルへと走った。

同じ轍を二度踏まぬよう細心の注意を払って、コナンは取引現場へ迫った。ビルの外でジンのポルシェを見つけたので、発信器兼盗聴器を仕掛けておくことも怠らなかった。過去と同じように見破られてしまう可能性は高いが、それでもやる価値はある。以前の、小五郎に迷惑を掛けてしまったような、あんな運命の悪戯もそうそうあるまい。

男たちの取引を窺うのも、同じ目的だ。仕込みも無しにこの体で渡り合えるとは流石に考えない。情報だ。男たちの会話から何かしらの情報を得られればいい。地名、施設名、人名、固有名詞……な

んだっていい。

そう思っていたのだ。ただ情報を得るだけで、それ以上の事はすまいと。

まさか、この体で正面切って連中と渡り合おうなんてこと、考える訳がない。

……そう、目の前で黒ずくめの男が取引相手の男に拳銃を向けて、今にも引き金を引くかという事態にでもならなければ。

自業自得。そう考えても良かった。だが、取引相手の男は丸腰で、見た目だけはどこにでもいるサラリーマンのような男だった。親も、家族もいるような。

……そうでなくとも、そもそも人が人を助けるのに、そこに論理的な思考は存在しないのだ。

絶たれそんな命を救うのは決定事項として、どれだけのことが出来るか。

上手いことやって逃げおおせるにしても、その場合、姿を見られただけで、それでアウトだ。江戸川コナンが奴らに目をつけられたら、何もかもが終わる。江戸川コナンも——工藤新一も。

それはあまりにも分の悪い賭けだ。体を支えるタイトロープは、まるで水を吸ったコヨリのごとく脆いだろう。

だが、それでもやるつもりだった。そうでなければ、その瞬間、自分の『命』は助かっても、同等の重みの別の『何か』が、自分の中で死ぬはずだから。

そう考える自分だから、横やりを入れた白い怪盗の行動は理解はできる。

自分以上にお節焼きで、無駄にハートフルなやつだから。なんでこんな場所に居るのかは知らないが、どうせ偶然だろう。

——偶然だから、自分には関係ない……そう言って、都合良く目

を閉じられるような器用さだけは、あの月下の奇術師は持ち合わせていないのだ。

——…そう、解っているのに。だが、何故か、腑に落ちないような、据わりの悪い感情が消えなかった。

自分の因縁の相手、ジンと対等に渡り合う凜然とした姿を見て、苛立ちと、焦燥に似たものが腹の底でうごめいた。

普通の犯罪者が相手だったら、啖呵を切って正面から戦えるのだ、この体でも。

怪盗だって、そういうときは影からサポートをよこしたり、場合によっては背中を預けるようにして共闘をすることもあって、こちらに対する信頼を見せる。

だが、今回ばかりは、怪盗は、完全にこちらを庇うつもりだ。手を出すなど、釘を刺された。

それは、コナンが、黒の組織に存在を知られれば破滅するからだ。どういう情報網をしているのか、怪盗もそれを理解しているらしい。

本来の十七歳の姿でだって、真っ向勝負を挑んで勝機があるのか怪しいというのに、吹けば飛ぶようなこの貧弱な矮躯で、あの化け物のような男を相手どるのは無謀としか言いようがないのは、確かだ。

——この姿を見られてでも、今日、この場でなんとしてもジンを倒し、捕縛するか。

——この姿を見られないようにしながら、欺き、まいて、攪乱して逃げおおせるか。

戦いを挑むなら、勝利条件は二つに一つ。どちらも勝率は低く、不確定要素の多すぎる危険な賭。

一見、二つ目の条件は難易度が低くそうだが、しかし、全力で逃げてもあつと言う間に追いつかれてしまうだろう惨めなストライドでは、姿を一切見られないように、というのは至難だ。また、ジンという男の抜け目なさは、そう簡単に欺けるものでもない。

そういうことを全部察した怪盗は、コナンを舞台裏に押し留め、脚本を書き換えて無理矢理ステージでの立ち回りを買って出た。

——そうして、白き怪盗・キッドと、黒づくめの男・ジンは対峙した。

コナンにとって、対極に位置するようなその二人が銃を向け合ったとき、

奇異な運命の歯車は噛み合い、廻り始めた。

その先で何が起るのか、当事者達ですら予測できないままに。

対峙を目の当たりにした瞬間に、沸き起こった苛立ちと焦燥——。それは、その組み合わせが最悪のカードであることを訴える、無意識からの警鐘だったのかもしれない。

そうコナンが思い至るのは、もう少し先のことだった。

(……くそ、どうなってるんだ——?)

コナンは、身を隠している柱の陰から首を巡らせて、煙幕が広がるフロアの状況を探った。

キッドの閃光弾から目を庇っている間に起こった展開が分からないうえ、ようやく顔を上げれば広がる煙幕が視界を覆って、四人の姿も確認できない。

「！」

競り合うような物音のあと、煙幕の中から銃声が数発響く。怪盗のものではない。続いて、舌打ちが耳に届く。

（ジン、か？）

コナンは柱の陰から慎重に身を乗り出し、目を凝らせた。銃声の発生元も、見失う前に奴が立っていたあたりだ。だが、ウォッカの気配はない。

（ジンが一人つてことは……）

キッドが、ウォッカを倒し、取引相手の男を連れて逃げたのだらうと、コナンは推測する。怪盗の手腕に舌を巻きつつ、複雑な想いを抱えて思わず自嘲まがいの笑みを頬に乗せる。

「——！？」

だが、自分もすぐにビルを脱出するか、それとも身を隠してやり過ごすべきか——そう考えかけたコナンの神経を、ゾクリと悪寒が駆け上がった。

撃鉄の上がる音がやけにはっきりと聞こえる。先刻の発砲とは違う、息を殺して獲物に狙いを定めるような気配が——

（キッ……！）

響いた銃声に、コナンは声を上げそうになるのをギリギリで堪えた。

銃声は四発立て続けに響いた。その残響が収まらないうちに葉莢がばらまかれる音がして、リボルバーに弾丸が充填される。

（野郎……！）

コナンは奥歯を噛みしめて、遠ざかっていくジンの靴音を聞いた。ジンの気配が語っていた。手応え有り——と。

落ち着け、とコナンは己に言い聞かせる。あの怪盗は、そんなにあっさり殺られるような玉じゃないと。

コナンは柱の陰から滑り出て、遠ざかっていくジンの足音を慎重に追った。

「……………」

そして、程なくして前方から聞こえてきた音に、コナンは安堵すると共に、口の端を持ち上げたのだった。

怪盗の持つ銃の発砲音、そして、煙幕かガスの噴射音。一対の靴音——ジンのものだ——が乱れ聞こえ、攻防を伝える。

ジンの持つリボルバーが銃声を上げるが、同時に、キッドの銃の発射音も絶えず続く。

くぐもった音と共に忌々しそうなジンの舌打ちが聞こえてくる。察するに、何かに足を取られて転倒したのだろう。それに続いて連続してガスの噴射音も微かに耳に届く。

したたかな怪盗の善戦にコナンは安堵の息を吐く。が、ふと、足下に現れたものに気付いて慌てて足を止めた。

「——！」

（あつぶねえ……危うく蹴つまづくところだったぜ）

足下に転がるもの——それは気絶したウオツカだった。コナンは、慎重に腰を低くして様子を窺ってみる。

外傷は見あたらないが、完全に意識をなくしている。キッドが麻酔ガスで眠らせたのだろう。

「……………」

コナンは息を呑んだ。思わず手を伸ばしかけてから、一瞬躊躇って煙幕の向こうを見遣る。

しかし、すぐに視線は横たわる男へ引き戻され、コナンはそのまま手を伸ばしてウオツカの懐へ慎重に差し入れた。

初めは刺激を与えないよう出来るだけ丁寧に探っていたが、次第に焦ってコナンは忙しく手を動かした。至る所のポケット、隠しポケットを探る。

（どこだ——それともやっぱ持ってたねえかっ？）

組織の正体の手がかりでもいい。だが、それより、なにより——

あの呪いのような薬の現物を、手に入れることが出来れば……！

そうだ。あの忌々しい組織にだって真っ向からぶつかって、あらゆる手段とコネクションを駆使し、全力で、徹底的に追いつめてやるのだ。

薬の現物があれば、完璧な解毒剤が作れる。そして、とりもどせるのだ。本当の自分を。

そう、工藤新一という自分を取りもどせたなら——。

『お前は、大人しくしておけ』

庇われて、お人好しな怪盗一人を危険に晒すようなこともしなくて済み、

『……コナンくん？　ねえ、コナンくん！？』

先ほど振りほどいてきた蘭の、あんな不安な声も聴かずに済むのだ——

ジンは己の肩に突き立てたナイフから手を離すと、そのままゆっくりと立ち上がった。

怪盗キッドと呼ばれる泥棒がいることは、以前から知っていた。しかし泥棒と言っても、盗んだものを闇のルートで売り捌くこともしないような、言ってみればアマチュア。確保不能と警察に謳われようが、そういう意味では裏の世界でのネームバリューがあるわけではない。

窃盗犯であるものの、大衆が口の端に上げて面白がるような、犯罪者と言ってもおよそジンとは違う世界の住人である。

だが、そんな眼中に入らない類の存在であるはずの怪盗の名を、ジンは記憶にとどめてあった。

それは、ジンが所属する組織と複雑な関係にある、とある犯罪組織が原因だった。

怪盗キッドは、その組織と因縁がある。詳しいことは分からないが、宝石ばかりを狙って窃盗を繰り返す怪盗とその組織は、敵対関係にあるらしかった。怪盗を抹殺する部隊のリーダーをしている男をジンは見知っていたが、その男は、決して木偶の坊ではない。腕の立つ生粋の殺し屋だ。

だというのに、怪盗は窃盗を繰り返す。そうして生き延びて組織と渡り合っている事実こそが、怪盗の名に、闇の世界でも十分な価値を持たせていた。

——盗みはしても、人を傷つけることはしない。そんな大衆の評価通り、怪盗は闇の住人をも死に至らしめたことは一度もない。

その事実が嘲笑すべきことであるのか——それとも賞賛に値することなのか——ジンには特段興味が無かった。

だが、銃を向け合った後の、今ならわかる。行動理念はともかく、その事実、賞賛を与えていいものであると。

殺し合いの場で、相手を殺さずに戦闘不能にするのは、殺して終えることより遙かに難しい。

それでも怪盗は殺生を選ばない。それは、そう——覚悟や力量が足らず『殺せない』のではなく、『殺さない』だけの覚悟と力量がある』のだ。確固たる意志で選びとっている。迷いがない。

（伊達と酔狂だけで、あんな奇特な格好をして怪盗なんて馬鹿げたものをやってる訳じゃない、ということか）

「月下の奇術師——大怪盗……か」

なるほど、確かにトリッキーなトラップ——……そして抹殺対象である男をあつさり盗まれてしまった。

怪盗にあだ名される呼称を記憶の隅から呼び出して口にしたらジンは、そのままそれを酷薄な笑みの形に歪めた。

手応えはあったと思ったが、予感通り生きていた怪盗は反撃を仕掛けてきた。

幾重ものトラップ——巧妙なブラフ。

麻醉ガスと鋭利なトラップの射撃、それに誘導された先には足下にワイヤーが。それを見抜き交わしたと思った場所にこそ、先に見たワイヤーよりも視認できない細いつや消し済みのワイヤーが仕掛けてあり、それに足を取られ転倒した。複雑に足を絡め取られ地に伏したところへ、それに連動して仕掛けられていた麻醉ガスが噴出、広がり、それを防ぐために鼻と口に腕を押し当てた。

——それこそが狙いであつたと気付いたときには、既に薬品を多少吸ってしまった。

ジンの服は、粉末にまみれていた。転倒した床に撒いてあつたそれを服に付けたまま、自ら鼻と口に押し当ててしまったのだ。

「おもしれえじゃねえか」

ジンは僅かに揺れるような頭を押さえると、足音を殺して、気配を探りながら踵を返した。ナイフの痛みで散らされて、意識の混濁はほぼ無い。

それよりも、生まれ始めたうずきを堪えるように、ジンは銃を握る手に力を込めた。

ジンは思い出していた。あの怪盗は、こうも呼ばれていたはずだ。

（夜闇を舞う、白い鳥——）

……実に巧い呼び名だと感心する。

——鳥。それは、ヒトに備わった生粋の狩猟本能を掻き立てる生き物の名である。

飢える者はその飢えを満たし得る対象として。富める者は、その富を誇示する象徴として。いつの世も人は、立場の隔てもなくそれを様々な欲望の対象として捉え、撃ち落としてきた。地におとしめ、羽を散らせる。しかもアレは白いのだ。

ジンの中に、先ほど脳裏に描いた、白い怪盗が鮮やかな赤に濡れる陶然たるビジョンが蘇る。

（確かに、狩りたいという衝動を沸き立たせる獲物だ、アレは——）

「——」

不意に思考を中断したジンは、押さえていた気配をさらに落とす、逆に感覚を高め研ぎ澄ませた。

足を止め、前方を窺う。……人間の気配があつた。

煙幕に包まれた中、もう三步、ジンは距離を詰めた。

人影が、ぼんやりと浮かび上がる。床に低くうずくまり、こちらに背を向けているようだった。

（ウォッカじゃあねえな）

ジンは、ゆっくりと腕を持ち上げた。ウォッカが倒れているはずの場所だが、シルエットのサイズが違っていた。しかし――

（――……？）

色が、白い姿ではないように見える。

（……こちらの目を欺くために服装を換えたのか？）

だが、どうにも違和感がある。うずくまっているせいなのか、やけに小さい気もする。

ジンは銃口を定めた。なんであるにしろ、動きを封じた後に確かめればいい――。

目の前の光景に、臓腑へ氷の塊を流し込まれたような感覚が起こつて、思考に空白が生まれる。

だが、体は自動的に動いていた。腕も上がり、声が思いがけず大きく出る。

「避けるー!!」

銃声が響く――。

「……っ」

嫌な汗が、背中を伝う。安堵の息を吐きたいが、そんな余裕はない。

快斗は、こちらの声に反応してすかさず身をかわしたコナンが、事態に気付き駆け出すのを視界の端に留めながら、

コナンに向けて発砲した銃口がこちらを向く前に、銃から鋭利なトランプを撃ち出していた。

だが、相手もそれを予測していたように身をずらし、銃弾を返してくる。さらに快斗も淀みない動きでそれを避け、そして――

「――!!」

(っ……くそ!)

快斗は銃弾をかわした姿勢から、そのまま流れるように反撃の銃

を構えようとして……相手の行動に一瞬瞠目し、すぐさま牽制するように銃を連射した。

だが、闇色の男は驚くほど身軽に長身を翻してそれをあつさりと交わし、快斗の危惧通りその姿が煙幕の奥へ薄れて消え去った。

快斗を置いて離脱する人物が消えた先は、第一の離脱者が逃亡した方角であり――。

「――ッくっ……！」

快斗は床に靴底を擦らせながら余勢を無理やり制動し、体制を立て直すのもそこそこに男の後を追って同様に駆け出した。煙幕の、白い闇に分け入る。

食い止めなければ、と祈るように強く思う。快斗はなんとしても、ジンがコナンを捕捉する前に追いつき、それを阻止しなければならなかった。

いくらコナンの知謀が高く、運動神経がいいとはいえ、体格差があるうえに相手は化け物じみた『本物』だ。アレをどうにかするのは、あの体では荷が重すぎる。

コナンの三步を、ジンは一步で詰める。それが現実だ。

しかも、万が一、今の接触でジンがコナンの姿を見て覚えてしまっていたなら、このまま組織に帰すわけにはいなくなる。手段は選んでいられない。どうにかジンを止めて――

「……………っ！？」

快斗は、思考を中断して、全神経を身体制御に回す。だが、もはや手遅れだった。

銃声が、空間を震わせる。間を置かず、快斗の左脚を強烈な灼熱感が貫いた。

銃弾はあやまたず軸足を撃ち貫き、体勢を立て直すことはかなわない。受け身はとった。が、勢いを利用してそのまま起きあがろう

としたところで失敗し、快斗はあえなく床へ倒れ込むことになった。撃たれた左脚が、快斗の期待を裏切りくずおれたのだ。

(……やられた……っ)

床についた腕で咄嗟に上半身を持ち上げながら、快斗は息苦しさを緩和させるように大きく息を吐いた。

喉元までせり上がるような激しい後悔に苛まれ、体が震える。なんとという下手打ち。

——嵌められたのだ。あっさりと。そして、最悪のペナルティを負ってしまった。

感覚が血液とともに流れ出して行くように、痺れが広がっていく。……激痛よりも、そのことが快斗を震わせた。以降この脚で、一体どれくらい動けるのだろうか。

快斗は上半身を浮かせかけた姿勢で動きを止め、歩み寄る黒い影を見上げた。コナンの後を追いかけて煙幕の向こうに消えたはずのジンが、目の前にいる。硝煙を燦らせる銃口が、ぴたりとこちらの急所を捉えていた。

(……まずいな、こりゃ)

息苦しさが増すのを自覚しながら、快斗は意地のようにポーカーフェイスを纏う。

快斗がそうして不敵な笑みを浮かべたその瞬間。

「——!？」

ジンが目を見開いて身を脇へ投げ出した。間髪入れずに、一瞬前にジンの体があった空間を、炸裂音と共に何かが貫く。

「チィ……!」

それは、ジンを狙った銃撃だった。

銃声が響く。ジンは、身をかわしながら反射的に手負いの怪盗へ

銃口を向け直そうしたが、銃撃の主はその暇を与えなかった。銃弾は、怪盗からジンを引き離すように連続して撃ち込まれる。

そのうえ、ならばと銃撃の元を探しても、射撃手が移動しながら撃っているためか、煙幕に阻まれてか、ジンの目には人影を見つけることが出来なかった。

そうして反撃できぬままに後退を余儀なくされ、ようやく銃撃が止んだところでジンが怪盗の居た場所を見やれば、既にその姿は消えていた。

「……………」

射撃手の気配も速やかに退いたのを感じ取り、ジンは赤い色が滲む床を見下ろした。

「右肩に当たっていたか」

血に濡れていた右肩と、撃ち貫いた左脚からの出血。

血痕を残し行くような真似は、やはりしていない。

だが、ジンは血の匂いを嗅ぎ分ける狼のように、怪盗が消えたであろう方角を見て、ゆっくりと薄い唇に舌を這わせた。

「……ゴメン」

コナンは顔を歪めて怪盗を見下ろし、目を閉じた。

「……………」

しかし、その悔恨に満ちた謝罪に、怪盗からは無反応が返るだけだ。コナンへ目を向けることもせず、手持ちの止血パッドと包帯で、自分の脚に応急処置を黙々と施していく。

コナンは、沈黙と、紅く染まった白いスーツの色彩に耐えかねて、手を差し出した。

「……包帯。肩、自分じゃ手当出来ないだろ」

「——いい。肩はもう殆ど出血してない」

怪盗の、にべもない返答。行き場の無くなった手を降ろしたコナンは、それを強く握りしめた。

怪盗の怒りはもつともだから、反論できずに奥歯を噛むしかない。物事に集中して周囲への注意が散漫になる欠点は、自覚していた筈なのに、最悪だ。

元の姿に戻る足がかりを得るところか、自分がこんな姿に成り下がった経緯と同じような状況を作り、しかも、そのツケを怪盗に支払わせてしまうなんて。

今まで味わったことの無いような絶望感が、足下にたゆたっているようだった。完璧に自分の失態で、怪盗にこんな怪我を負わせたのだ。それが、酷く悔しい。この存在とは、いつだって対等でありたいと思っているのに。

壁に頭を打ち付けてしまいたい気分だが、今はそんな自己満足で自分を慰めるべき時じゃないと、コナンは掌に爪を食い込ませながら奥歯を噛んでいた。

「！」

と、怪盗が止血を終え、そのまま立ち上がろうとするのに気づき、コナンは思わず手をさしのべた。だが、怪盗は寄りかかっていた壁に手を突いて、自力で立ち上がる。

コナンは唇を噛んで視線を落とした。怪盗は自分に腹を立てて手を取らなかった訳ではないのだろう、と思う。それもあつたかもしれないが、何より、自分の力では、怪盗が立ち上がるのをどうせ手助けすることは出来なかったのだ。

だが、それでも、もう怪盗に状況を任せてはおくことは、コナンにはできなかった。元々、自分の領分という認識もある。それを告げようと、コナンは表情を固めて口を開いた。

「なあ、キツ——」

「——オレは」

だが——こちらの台詞を遮って、怪盗が頭上から声を落とす。その冷えた声音に瞠目し見上げたコナンの視線の先で、怪盗の血の気の失せた唇が、無機質に動いて言葉を紡いだ。

「——オレはもう、お前と一緒に行動するのはゴメンだ。足を引っ張られるのもな」

「……」

耳を疑うような台詞に、顔の筋肉が強ばった。

「こっからは別行動にしようぜ、探偵君。……もう懲り懲りだ。お前に関わるとろくな事にならないって、よく分かったよ」

「……………」

冷笑を浮かべる瞳がこちらを見下ろしていた。コナンは、それを目をそらさずに受け止めた。

「……わかった」

強ばっていた力を抜き、同意して頷く。

そして心の内を見つめた。自分の中の片隅、満たされていたものが抜け落ちていく感覚。ずっと埋まらなかった部分を埋めるものを、ようやく手に入れたと思っていたのに。

（こんな形で失うなんて）

嫌なくらい心が凪いでいく。その心境のまま、コナンは口元にだけ静かに笑みを乗せてキッドを見上げた。

「わかった。今オレも、そう提案しようと思ってたところだ」

「……………」

「オレが、ジンの気を引きつける。その際にお前は逃げてくれ」

だが、その誠意を込めた言葉すら嘲るように、冷たい眼光の怪盗は鼻で笑う。

「オレの言ったこと聞いてたか？ 協力だの連携だの………… もう懲りたんだって。オレは先に帰らせて貰うけど、余計な干渉はお断りだぜ。邪魔されちゃたまらねえからな」

「……………」

「オレはオレで適当に脱出するから、お前も精々巧くやるんだな」

怪盗が、身を潜めている細い通路から出て行くこうとする。

「………… どうやって脱出するつもりだ？」

コナンは僅かな躊躇いを感じつつ、後を追ひ、問いかけた。

「………… エレベーターは、もう使えない。」

ここへ転がり込む途中、エレベーターの方でビルを揺るがす爆発があった。エレベーターボックスが落下する衝撃もあつたし、数回爆発はあつたから、エレベーター脇の階段もやられている可能性は高い。ジンは、どうやら逃がす気も引く気もないらしい。

窓から脱出するにも、ここは七階だ。ちんたら降りていたら、間違ひなく銃弾の餌食だろう。

非常階段でも探すつもりか？ と問うコナンに、怪盗が嘲笑を零

す。

「ま、お前はそれがいいかもな。ただし、その場合あの男が待ち伏せしてる可能性は高いから、蜂の巣にされないようせいぜい気をつけるこつたな。……オレを誰だと思ってんだ？ オレには翼があるんでね」

悠々と空から帰らせてもらうさ。そう言う怪盗に、コナンは眉を顰めた。怪盗の撃たれた箇所が肩と脚だけでないと、気づいていた。「だってお前……背中撃たれてるだろ。防弾装備してるみてーだけど、マントは穴開いてるぞ」

「っは。んなもんはどうにだってなるんだよ」

怪盗が、通路の出口前で立ち止まる。

「じゃあな、迂闊探偵。この事態に責任を感じてるんなら、せめてこれ以上オレの邪魔だけはしないでくれよ。オレが脱出するまで、この通路の奥でもじっとしててくれると、こつちとしちゃ大いに助かる。……そうだな、一時間くらいは行動を自重してもらおうか？ 事態を掻き回されて、こつちがとばっちり食うなんてもう遠慮したいんでね」

「……………」

(……………やっぱり変だ)

——怪盗を、先に逃がす。それは自分も最初に考えたことで、怪盗自身もまた、そう言っている。だが、奇妙な違和感を感じて、コナンはフロアの気配を探っている怪盗の横顔を見据えて目を細めた。よくよく考えればおかしい、とそう思う。この怪盗の言動、突き放す言葉を聞いたときには自己嫌悪が手伝って思わず鵜呑みにしたが……。

チリチリと胸を灼く焦燥が、コナンの内で湧き起る。

表だと思って握っていたコインを、いつの間にか裏返しに握らされているような気がして。

怪盗が巧妙にひっくり返して握らせたもの、それは――。

(……まさか――こいつ……！？)

出て行こうとするキッドの手を、コナンは掴んで引き戻した。

「てめえ、キッド！ お前、自分が囷になるつもりで……！」

そうだ、囷になってジンたちを攪乱しこの場から引き離し、その隙にコナンを逃がそうと考えている。

自己嫌悪も、劣等感も――モヤのようだったモノ全部が吹き飛んで、一気に思考視野が広く明瞭になる。コナンは確信して、怪盗の手を強く掴んだ。いかにもこの馬鹿な怪盗が考えそうなことだと。危つく誘導されてしまうところだったが、気づけて良かった、と胸をなで下ろす。これだけの負傷をしている怪盗一人をジンの前へ立たせるなんて、冗談じゃない。

コナンに手を引かれた怪盗は、抵抗無く後退し、コナンへと向き直った。

その手に、スプレーが構えられている。

「……！」

至近で吹き付けられたガスを吸い込んで、声を上げる間もなくコナンは意識を失った。

快斗は力を失った小さな体を片腕で支え、膝をついた。

「やっぱ、ばれちまうか。ま、名探偵だもんな。しょうがねえか」
苦笑を零してコナンの体を抱え上げる。

「……っ」

立ち上がる動作だけで、体が酷く辛い。止血はしたが、既に、不調を感じるのに十分な失血量だった。

そして、右腕はまともに上がらず、左脚はつま先から冷えてきて感覚が覚束無い。

「馬鹿だな、名探偵。足手まといはオレの方なんだよ、これじゃ」
冷静に考えればすぐにわかったことだろうに。どうも、今日の名探偵はいつもの調子が形を潜め、彼らしくなかった。

——だから、そこに付け入ろうとしたわけだが。

「……ごめんな」

快斗とて心にもないことを口にするのは痛かったが、効果的にコナンの精神をより弱らせることを目論んであんな言葉を吐いたのは紛れもない事実だ。

正直なところ、快斗はコナンに対して演技ではなく憤っていた部分は実際あった。だが、それは自分が撃たれたことについてじゃない。コナンの慎重さに欠ける行動についてだ。焦燥を押さえきれなかった気持ちは理解できるが、万が一のことがあれば大勢の人が悲しむということをもっと自覚しなくてはいけないのだと。

それについては、今でもひとこと言っただけでいいくらいだ。だが、コナンが負い目を滲ませていた自分の怪我については、微塵たりとも、快斗はコナンの非であると感じていなかった。

……コナンに襲いかかるうとしていたジンを見て、動揺した。それをジンに見抜かれ利用され……そして、誘い込まれるままに罠に掛かってこのザマだ。動揺を引きずっていたせいでこうなった。

これは、十八番であるはずのポーカーフェイスを失敗した上、その立て直しも出来なかった己のミスなのだ。

（ミス——いや、今まではあれでオレは十分やってこれてた……粗があっても、まだ余裕があったから）

その見過ごしてきた粗を、あの男は浮き彫りにした。そして補う余裕も快斗に許さなかった。

それは、一瞬で相手の弱い箇所を見抜き、シームレスに利用し確

実にそこへ牙を突き立てる……そんな狼を相手にしているのでなければ、問題にはならなかったレベルの失態。

（——やっぱり、あのジンって男……格が違う）

快斗は改めて戦慄する。

実際、一瞬でもジンが思考の間を設けでもしたならば、快斗はジンの意図に気づけたはずだった。たった、その間すらなく……呼吸をするようにあの男は罨を張り獲物を誘い込んで牙をむいたのだ。

……確かに、コナンが油断をしなければ自分のミスは引き起こされなかったかもしれない。だがそのような、自分の至らなさを人の責任に転嫁するような厚顔さを、快斗は持ち合わせていなかった。

それでも、快斗は冷めた軽蔑を装ってコナンを罵った。それが精一杯だったとも言える。

快斗は溜め息を吐く。

（ちよつと下手な芝居だったかな……）

撃たれたのは名探偵が悪い訳じゃない……完全に自分のミスで、名探偵がそれに責任を感じる必要はこれっぽっちもないのだと、言っただけ。

（ごめんな。焦って、オレも少し混乱してるのかもしれない）

……あんな諦観を滲ませた笑顔は、見たくなかった。

しかも、それを引き出したのは紛れもなく快斗自身だったのだ。

快斗は、眠ったままのコナンをロッカー室へ運んだ。奥の方のロッカーへ膝を折り体を丸める体制で詰め込む。無理のない姿勢にしてやって、酸素ガスが入った小さなボンベを膝の上へ置く。酸素吸入用だが、調整して微量ずつ漏れるようにセットした。

「……あれで名探偵が大人しくしてくれるのが一番だったんだけどな。……勝手に決めちまって悪いけど、やっぱりオレが見てらんねえからさ。こんなとこに収まっちまうような体で、あんなのと真面向勝負は流石に無理だろ。名探偵には名探偵の闘い方がある。だから、ここはオレに譲っとけ」

水なしで錠剤を無理矢理飲み込んで、快斗は胸を押さえた。即効性の鎮痛剤と増血剤。気休めのようなものだが無いよりはマシだ。

（……一番のネックは、オレだけじゃなくもう一人いるってことを、向こうに気付かれちゃったことだな）

打ち棄てられたビルには、置き去られたものが多様に散乱していた。それらを物色し、快斗は即席で仕掛けを作り上げる。

（もう一人の方も逃げたって、奴らに思いこませねーと。オレだけ逃げて見せて引きつけるだけじゃ、ちよつと不安が残るからな）

小さな探偵は巧く隠したから探されて見つかることはないだろうが、奴らが血迷ってビルごと倒壊させないとも限らないから、完全に意識を外へ向けさせなければならぬ。

コナンが目を覚ますのは、おそらく一、二時間後。それまでに完全に終わらせないといけない。

（あーあ、今日衛星携帯持ってこなかったのは、本当にミスったな……）

奴らも正面から警察と事を構える気はないだろうから、警察に連絡が取れば、パトカーを大量に派遣して貰って、それを待つ間、時間を稼ぐだけで良かったのだ。

だが、このあたりは普通の携帯電話の電波が届かない。……それを知っていれば、衛星経由の携帯電話を持参したのだが。

もつとも、そういうことを調べるために、今日快斗はこの地へ来たのだから因果な話である。次の予告を出す博物館の初見下調べをちよつとしてくるつもりで、夜、家を抜け出してきたのに。

（朝までに帰らねーと、母さんに心配かけちゃうな）

そう考えて、快斗はふと苦笑を漏らした。

だめだ。既に手酷くやられていて、この体では家には帰れない。母にはもちろん、寺井にもこんな怪我を見せたくはない。

「ほんと……厄介なことになっちまったぜ」

額に滲む汗をぬぐってばやき、快斗は不敵な笑みを浮かべる。
ポーカーフェイス。

どんなに厳しい状況でも、それだけは捨てられない意地がある。

（……名探偵、怒るかなー）

（かなり怒るだろうなあ）

（次の仕事で非人道的なことしまくられるのも嫌だし）

（さっさと片付けて、名探偵が目覚めます前にロッカーから出して
やって、謝ってご機嫌とりだな）

益体もないことを考えながら、快斗はこちらへ確実に迫ってくる
狼の気配を迎え撃つべく、ままならない身体を緊張の糸で無理矢理
引き締め制御する。

手指の先から、足のつま先まで。

大丈夫。今はもうあの何も知らなかった頃の、無力だった幼い自
分じゃない。護ることも、戦うことも出来る。

父を一人で戦わせ、喪った理由さえ知らずにいた自分では、もう、
ない。目の前で誰かを喪う痛みは、もう沢山だ。身を切り刻むよう
な、後悔も。

この、怪盗キッドの目の前で、

あの希有な名探偵を、あんな連中に奪わせるわけにはいかない――
ー。

「落ち着きなさいよ工藤くん!!」

哀は、焦って訴えかける。鋭く切れるような気配を濃く纏うさまに気後れしそうになるが、それでも、哀は彼の腕を掴んで引き留めた。

不自然な時間に不自然な場所へ、迎えに来てくれるよう阿笠家へ電話を寄越しかと思えば、やはり不自然にたった一人で、薄汚れていて。

帰りの車の中では一言も発せず、言葉を掛けることも躊躇わせた彼は、阿笠邸に帰り着くなり、こう言っただ。

「アポトキシンの解毒剤。試験段階のでいいから、寄越せ」

と。

そのコナンを見返して、哀は絶句した。言葉の内容にも驚いたが、彼が、小学生はおるか高校生とも思えない得体の知れない瞳をしていたからだ。

「なに……言ってるのよ。何があったの？」

「いいからくれよ」

「っ——、何があつて、どうするつもりなのか聞かなきゃ、渡せるわけ無いでしょう。アレは、一時的に効くだけ。数時間で効果が切れる不完全なものよ……分かってるでしょう？」

「一時的にでも戻ればいいんだ。問題ねえ」

「多用すれば耐性が着いて、完全な解毒剤も受け付けなくなるかも知れないって警告したこと、忘れたの？」

「覚えてるよ。いいから……」

「何があつたのか！　まずそれを書いて」
「……………」

そう詰め寄れば、コナンは意外にもあっさりと起きたこと全てを哀と阿笠博士の前で淡々と語った。

だが、冷たい眼光で淡白に話されても、聞き手もそれに倣えるとは限らない。

話の内容と展開に顔色を変え、哀は平静を失って取り乱し声を荒げた。

だが、表情も動かさないコナンに唇を噛み、震える手を握ってくれる阿笠のおかげで何とか気を鎮め、重い溜め息を吐いた。

「あなた達って、探偵と怪盗なんていう真逆の存在なのに、ベースの部分がそっくりなのね。両方とも救いがたい馬鹿だわ。何故、見も知らない善良でもない人間の為にそんなことをしてしまうのよ。少しくらい利口になったらどうなの」

哀は頭を抱えた。あのジンとあのハートフルな怪盗さんが対決するなんて、想像できなかった。

そして、怪盗さんが……。

「……でも、あなたが目を覚ましたら、もう誰もいなかったんでしょう？　怪盗さんが、予定通りに巧く引き離して撒いてくれたんじゃないの？」

「巧くやったんなら、どうしてオレの様子を見に戻ってこない？　あのお節介が、オレが目覚めたらアイツの安否を気にするって……気付かないわけないだろ。それでいて姿を見せない、連絡一つ超越さないのは、それが出来ない状況にあるってことだ」

「……なら……それで、怪盗さんがあの組織に連れ去られたのだとして……あなた、どうするつもりなの？　数時間しか保たない解毒剤を飲んで、それで十七歳の姿を取り戻して——……組織に乗り込んで、彼を助け出すとでも？」

「……まさか」

フツと、コナンが口の端を上げて笑う。

「オレは、オレの出来うる闘い方をするだけだ」

——と。だが、すぐに笑みは抜け落ち、感情の無い視線が哀を射抜いた。

「最初に言っておくが、オレの事情にお前を巻き込むつもりは毛頭ない。親父にでも頼んで匿って貰うから、黙って従ってくれ」

「……なにいつて」

「解毒剤は、証明に使うんだ。オレが、工藤新一であることの……もう、ちんたらやってる訳にはいかねえんだよ。保身とか、逃げる道の温存とか……んなもん、もういらねえ。ビクビク奴らの影を窺って、気にして、そうやっていく内に、大事なものを傷つけたり……もう、たくさんだ。ましてや奪われるなんて、冗談じゃねえんだよ」

奪われたもの、全部取り返してやる。

コナンは、冷え切った藍色の劫火を瞳の奥底に燦らせる。

「アイツを……あんな奴らに奪われるなんて冗談じゃねえ」

「アニキ……あの、ホント、すいやせんでした」

車内の微妙な静寂に耐えきれなくなつて、ウォッカはもう何度目になるか分からない謝罪を、兄貴分に当たる男——ジンへ告げた。助手席に腕組みをして身を沈めるジンは、抑揚のない声でそれに応える。

「……拳銃まで奪われる失態だからな。お前はもっと状況を読む力

を養え」

「そ、そうですね、オレ……」

ウォツカはハンドルを握り締め大きな体を縮込ませる。

夜の静寂に静かなエンジン音を唸らせ、街灯の光を一定間隔で浴びながら黒塗りの車は走る。

でも、とウォツカは言う。

「オレの拳銃、そのキッドの仲間にとって行かれちゃったんですね」

「……そう考えるのが妥当だろう。なにせ、そいつはお前が落としたそれを拾って、オレに向かって発砲してきたしな」

「す、すいやせん……」

「……………」

（……仲間か）

ジンは、窓硝子の向こうを睨み映像を再生させていた。まるで、怪盗はアレを庇い護るようだった。アレにジンが接近した時には只ならぬ焦りを見せ、追いかける振りをしてみれば、そのブラフにあっさり引っかかった。脚を撃たれた後も怪盗は一人で立ち回り……仲間を逃がしたらしい。らしいというのは、その逃亡を目撃したのがウォツカであるからだ。

倒れた怪盗を助けるために撃ってきた射撃の腕は確かだったのに、何故怪盗はその仲間と協力して向かってこなかったのか、不可解だった。危険に晒すことはおろか、ジンの目にも触れさせまいとするような振る舞い。

「逃がしちゃったけど……大丈夫ですかね」

ウォツカが心配そうに呟く。ジンはせせら笑った。

「甘いとはいえ、一応犯罪を犯してるんだ。まさか、警察に駆け込んだりはしないだろう。それともあの取引相手の男のことか？ 殺し損ねはしたが……あのカンパニーに牽制としてヤツの死体を晒してやるはずのところが、逃げ帰ったヤツが上層に我々の意図を報告することになったまでだ。まあ、構わんだろう。この辺を踏まえて、

連絡役に報告をしておけ」

「へい。……お咎め、やつぱりありますよね」

「……さあ、どうだろうな」

ジンは銜えていたタバコをふかして紫煙を吐き出すと、肩越しに後部座席へ視線を巡らせた。

「……………」

ウォツカの言うとおり、予定は狂った。だが、戦果が無かったわけではない。思わぬ上物の戦利品を、ジンたちは、この車へ積み込んで帰路に就いていた。

ジンの視線の先で、黒い革張りのリアシートへ無造作に横たえてあるその戦利品——散々手こずった末によく仕留めた怪盗は、ぐったりと意識を失って死んだように脱力していた。ウォツカの手で担ぎ込まれたままに、身じろぎもなくシートに身を沈み込ませている。

戒められ転がされるその体軀は意外なほど細く、戦闘中にはあれだけのプレッシャーを与えてきたというのに、力の抜け落ちた体は酷く頼りなくジンの目に映った。

ひっそりと閉じられた瞼の上から黒い布を巻き目隠しを施したの
は、一応の備えとしてである。意識が戻ったときの逃亡を防ぐため
手枷も掛けてはあるが、その必要がないくらいに怪盗の姿は弱々し
い。肌は青ざめ、呼吸が浅い。

怪盗は、ジンにとって久しぶりに撃ち合ってうれしい相手だった。

いや、撃ち合うと言うよりは、狩りを愉しんだという感覚の方が
強いかもしれない。油断をすればどんな反撃を受けるか判らない奇
抜な戦術と、知略。手負いだというのに思い切りの良い身のこなし
と、それを支える胆力は賞賛に値した。

逃げまどう標的を潰していくのも楽しみがあるが、やはり、鋭い
爪を持つ獲物——それを仕留める際の充足感には格別なものがある。
特にそれが、闇に清然と映える白い鳥となれば。

「……………」

スモークガラスから降る光量はごく僅かで、その淡い白さは、闇の中で幽かに浮かび上がるようである。

そこに重なる、羽根を散らした鳥のような倒錯的な芸術性。それを満足げに眺め、ジンは口の端を歪めた。

「——まあ、怪盗キッドを墜としたんだから、失態の分の補充は十分きくんじゃねえのか」

ジンは、己の失態についてなおも悩み唸っている弟分に視線を戻す。

「へい……でも、アニキが殺つちまわないで生け捕りにするつてのは珍しいですね。正直ちよつと驚きましたよ。そいつ、どうするんで？」

「ふん……頭は切れるし技能は豊富……戦闘能力も申し分ない。うちの組織の為に従順に尽くすよう調教してもいいし、売りに出せばいくらかでも欲しがる奴がいるさ。それにマスコミに騒がれるだけあつて見た目もいい。確保不能と謳われる怪盗を鳥かごに入れて鑑賞したいなんていう好事家だっているだろうよ。そういう連中は、いくらでも金を積んでくれるからな」

「……はあ」

「まあ、一番有力なのは、スネイクの奴に買わせる線だな」

「……スネイクつて、あの宝石を集めてる組織の——、以前アニキといきなり銃を突きつけ合つて挨拶を交わしていたあの男ですかい？」

「そうだ。奴とキッドは因縁があるからな。キッドを譲つてやれば、やつところに貸しを作れる」

上の判断を仰げば恐らくそうなるのだろう——そう結論付けながら、ジンは短くなった煙草をもみ消して背後をもう一度見やった。

渴きを感じた唇に、舌を這わせる。

「——だが……苦勞して捕らえた上等な鳥だ。鳴き声も確かめずに手放しちまうのは、少々惜しいかもしれねえな——……」

温度のない声で、そう低く呟いた。

「なんてことかしら……」

女は、悔しそうに唇を噛んでいた。

——この人は誰だったか……。

快斗はその人物を眺め、首をひねった。懐かしい気配。

部屋の扉を閉め、こちらへ近寄ってくる女に対しようとして体を起こしかけるが、酷くだるくて、至る所が尋常じゃない痛みを発するので、それを諦める。おまけに両手首がまとめられて拘束され、床に繋がれていた。

（——……あ……オレ……）

状況に理解が及んで、次の瞬間、咄嗟に部屋の中の気配を確かめていた。

「……………」

あの男はもういない。思わず体の力が抜ける。

次いで自分の格好も確認すると、一度身体を拭われてから簡単な治療をされ、そのうえで元のように服が整えられていた。弾けたシヤツのボタンも、何故か律儀に糸で縫いつけ直されている。

終わった……ということだ。あの、行為。あの男はとりあえずのところ満足して、出て行ったのだ。

そう確かめて安堵したというのに、逆に背筋が怖気に震えて鼓動が強く胸を打ち、快斗は奥歯を噛んだ。

そのフラッシュバックを振り払うように、快斗は強引に意識を切り替えて傍らへ来た女を見上げる。

女は手を伸ばして、快斗の髪をそつと撫でた。

「やっぱり、見間違いではないわね。どうしてあなたが……」

「……………」

女は、昔を思い出すような遠い瞳をしていた。喪服のような、黒一色の服。あのジンという男と同じ組織の人間であるはずの女は、慈しむように快斗の髪に触れる。

だがすぐに思いを断ち切るようにその手を止め、女はジッと快斗の双眸を見詰めた。

つられて同じように快斗が見返すと、女が口を開く。

「……………」

女は声を発しなかった。

しかし、開かれた唇は滑らかに言葉を紡ぐ。

『声には出せないから、コレで』

読唇術が身についている快斗には、スムーズにそれが読み取れた。そして、持ち前の聡さでもって、女の後方の天井に付いているカメラ、集音機から意図を悟り、睨を数秒落とすことで了承の意を女に返した。もちろん、カメラや集音機に対し、その一切を悟らせない仕草だった。

その反応に、女はどこか嬉しそうでありながら一瞬泣きそうな瞳をしたあと、満足げに笑った。

女は、怪盗を傷つけこうして監禁している組織の一員である。それは、怪盗の目にも明らかではなかった。

『ありがとう……………』

女は遠い追懷を滲ませる。あの人の愛息子。優しき月の寵児……………
白い魔法使い。

『私が、絶対になんとかするわ』

『どうにかして逃がしてあげるから……安心して、キッド』

『これからあなたは別の拠点へ移される。その途中で……』

「もし、ジュリアという名の方をご存じだったら、伝えてくださいませんか。——お心遣いに感謝します。お会いできて嬉しかった。次にお目にかかる際には、是非お話を伺いたいし、聴いていただきたい。……どうかそれまで、ご壮健でありますように——……と」

車内に、凜とした声が涼やかに通る。一言も発することの無かった彼は唐突にそう告げたかと思うと、突然行動に出た——。

「あら……ジン、あなたも一緒に来るの？……別に必要ないわよ？ 知っての通り、キッドはかなり弱っているから、監視なんて」

支部であるこの小さな拠点からメインの拠点へと怪盗キッドを移すことが決まって、移送役を買って出た女——ベルモットは、「オレも共に行こう」と名乗り出た男——ジンを見やって口の端を上げた。

「私を毛嫌いしているあなたが珍しいじゃない。私を心配してくれるの？……それともキッドにご執心なのかしら」

「フン……お前を毛嫌いしているからこそ、一緒についていくのさ」
「……………」

ベルモットは、ポーカーフェイスを被りながら臍を噛んだ。
ジンとウォッカが帰還した際。それに遭遇した自分が微かに顫してしまった動揺を、やはりこの男には気取られていたのだと悟る。

ウオツカの厳しい肩に荷物のように担ぎ上げられた、傷つき意識を失ったキッド。その姿を目にして感じた心の揺れを、完全に押し殺すことが出来なかった。

「……いいわ、わかった。一緒に行きましょう」

（厄介な男に目を付けられてしまったわ）

ベルモットは二度と付け入る隙を与えないよう頬笑みながら、それでも、と思う。

それでも、彼を助けなければ。自分にとって不利な一面を、この男に掴まれてしまう危険があらうとも。

あの純白の鳥が、闇に囲い込まれ光を失っていいはずがないのだ。

曇天の元、正午を過ぎた時刻に車はその拠点を後にした。

ベルモットがハンドルを握り、後部座席右にはジンが乗り込んで、そしてジンの隣、後部座席左には怪盗が乗せられ、車は静かに走り出した。

人家の周辺や繁華街を時折通りながらも、後部座席の窓には透明度の低いスモークフィルムが施されているため、車内の光景を人が見とがめることはない。

怪盗は、座席に座らされてはいるが、両手両足は拘束され、アイマスクを掛けられている。青いシャツに白いスラックスで、靴は与えられず裸足だ。

意識を奪うことはしていない。念を入れるなら薬を投与するなりしてそうすべきだが、そうしなかったベルモットの行動に、ジンも口を挟むことはしなかった。

そう、やはりジンは何か確信を持っているのだろう。勘なのだろうが、獣並みの鼻だと、ベルモットは忌々しく思う。

ベルモットが怪盗を逃がすのを待ち受けようという腹積もりなのだ。以前から煙たく感じているベルモットをおとしめる、その材料

に使ったために。

「……んっ……っ」

不意に、微かなうめき声がベルモットの耳に滑り込んだ。ベルモットは音を立てずに息を呑んで目を睜り、じわりと奥歯を噛んでから口を開いた。

「……ジン、何をしているの？」

感情を込めないただの質問として、声を発する。衣擦れの音には気づいていたが、体重移動には気づけなかった。精々足を組み直したのだろうと思っていたジンが、バックミラー越しに、こちらに背を見せている。

……キッドの姿が見えない。ジンの体躯が、彼とミラーの間を塞いでいるせいだった。

それでも、抗うようなキッドの動きをジンがねじ伏せ、彼に何かを強いていることは、ジンの動作と、苦しげに漏れる、呼吸を継ぐうとするキッドの息づかいから理解できた。

不意に、くぐもった衝撃が車内に響いた。声にならない音が、キッドの喉から鳴る。——ジンがキッドのみぞおちに拳を叩き込んでいる光景が、バックミラー越しにベルモットの目に映る。

「——ちよっと、ジン！」

「………」

衝撃で身体の制御を失うキッドの喉に、ジンの手がかかっているのが見えた。もう片方の手は仰向けさせるように彼の口元にかかっているのが僅かにうかがい知れる。——殺そうとしているのか。そう思い至ったベルモットが思わずアクセルからブレーキへ、足を踏み換えようとした、その瞬間——。

「——っ……！」

キッドが、ひゅつと息を吸い込む音が車内に短く響いた。そして、むせるように咳き込む。

「……………」

ベルモットは僅かにさまよわせた後、そのまま唇を結んだ。彼の首に掛けられたジンの手はしばらく様子を見るように固定されていたが、首を支えるのが目的であるのか、それ以上の力はこもっていない。

息を乱し咳き込むキッドから、ジンのし掛かっていた身体をどかす。それをミラー越しに確認したベルモットは、剣呑に目を細めたまま、呆れた様相のため息を吐きだした。

「悪ふざけはよしなさいな、ジン。その怪盗さんはこれから本部に連れて行かなくちゃならないのよ？ 衰弱してる状態なんだから、そういう悪戯を仕掛けると殺しかねないわよ」

それを聴いたジンがあざ笑うように喉を鳴らした。

「殺すつもりなんてねえさ。ただ、あまりに静かだったもんだから、死んでるか——あるいは、なにかやらぬ事でも考えてるんじゃないかと思っただけ。確かめるついでに、意識を刈り取っておこうかとも思っただが……いまいちうまくいかなくてな——」

「……………」

（要するに、私への当てつけっけ）

キッドを苦しめてこちらの反応を確かめると同時に、それを愉しんでいた。そういうことだろう。

ベルモットは、バックミラー越しに温度のない視線をジンに向ける。ミラーの端に映ったジンの口の両端が、愉しげに吊り上がっていた。

車が走り出してから、一時間が経過した。黒塗りの車は、山間の

車通りのない道を、ひた走っていた。

ハンドルを握るベルモットは、後部座席の様子と、時計を見やる。ベルモットが怪盗を逃がそうと思っている地点までは、あと三十分ほどだった。

ジンが怪盗にちよっかいを掛けたのは一度だけで、それ以降は車内は沈黙に支配されていた。耳を澄ませば、押さえているが辛さの滲む怪盗の浅い呼吸が聞こえるが、それだけだ。

そうやって、沈黙の落ちる中ベルモットがこれからのこと、または過去のこと思考を割きつつ車を走らせていた時である。

車は、橋に差し掛かった。緩いアーチを描く、川を渡る橋の上に車が乗り上げる。

そのとき……、

「もし、ジュリアという名の方をご存じだったら、伝えてくださいませんか。——お心遣いに感謝します。お会いできて嬉しかった。次にお目にかかる際には、是非お話を伺いたいし、聴いていただきたい。……どうかそれまで、ご壮健でありますように——……と」

と、車内に、凜とした声が涼やかに通る。一言も発することの無かった怪盗は唐突にそう告げたかと思うと、突然行動に出た。

咄嗟に、ジンが腕を伸ばすが間に合わない。

いつの間に拘束を解いたのか、ドアを開けた怪盗が走行する車から外へ飛び出した。

ベルモットは強くブレーキを踏み込んだ。呆氣にとられた風を装って踏むタイミングをコンマ数秒遅らせたが、実際、咄嗟には硬直して動けなかったのも事実である。

酷い炸裂音と、悲鳴を上げるような音が後方から響く。ジンが、リアガラス越しに拳銃を発砲したのだ。

「チイ……」

忌々しそうなジンの舌打ち。それを聴いてベルモットは安堵するが、背筋からはまだ冷たさが退かない。車はタイヤをロックしかけながら、五十メートルほど先で停止した。

完全に停止する前にドアを開け飛び出したジンを追って、ベルモットもまた車外へ出る。

ジンが、再度発砲する。その銃弾が、怪盗の腕を掠る。

だが、欄干を飛び越えた怪盗はそのまま身を躍らせ、視界から消え去る。

川へ飛び降りたのだ。

ジンと共に、ベルモットは欄干へ駆け寄った。

眼下には、かさのある濁った水が滔々と流れている。ここの上流では、昨日豪雨があったのだったとベルモットは思い出す。水面にも、川辺にも、キッドの姿は見つけられなかった。

（無茶をして……！）

時速60km出ていた車から転がり出るのも無謀なら、流れの速い濁流へ飛び込むことも無謀だった。正常な状態だろうと着衣のまま泳ぐことが困難であるのに、彼は肩と脚に軽くない怪我を負っている。そのせいで発熱に冒されてもいるというのに。

「……やられたわね……」

心中の感情の渦とは裏腹に、ベルモットは薄く笑って腕を組んだ。

「まさか、こんな無謀なことをするとはね……。ねえ、ジン。あなたキッドが手枷を解いていたの気付かなかったわけ？」

「……………」

「ふふ、さすがは天才奇術師と謳われるだけあって、拘束からの脱出は得意ってことね」

だが、彼はどうやってこの地理を知り、行動に出たのだろうか……と、ベルモットは思う。迷いのない行動だった。

「ねえ、彼、アイマスクで目隠しはきちんとされていたわよね。なぜ、川に差し掛かったって分かったのかしら」

同じように考えていたのだろう、視線を辺りに巡らせたジンが、鼻を鳴らす。

「フン……あれか」

「……まさか、ジョイント？」

「だろうな。もしかしたら川の音も聞こえたのかもしれないが、踏み切らせたのはそれだろう。口を開いたのはその直後だったはずだ」

ベルモットは遠く、橋の向こうに見えるそれを見詰める。

ジョイント——つまり伸縮継手だ。道路と橋梁部分の境にある、温度変化の影響による上部構造の伸縮を吸収したり、耐震性を向上させるために設けられる部材。衝撃や伸縮を吸収させる目的ゆえに、それはゴムか、あるいは鋼材を組んで作られる。

だから、タイヤへ伝わるものが違うのだ。多少の凹凸があるから衝撃があり、そして通過する際もとても特殊なのは音である。

道路を走行するうえで、ゴムや鋼材を踏むのは他にない。それをタイヤが通過すると、アスファルトとは違った音が出る。

「なるほど……。その上僅かながら傾斜が始まれば、橋梁に差し掛かったとわかるわね」

ただ、陸橋である可能性も考えると、やはりこの水量の増した濁流が耳に届いたのかもしれない。

「クク……」

不意に、ジンがくつくつと嗤いだした。

「……何がおかしいの？」

嫌な嗤い方だ。こういう嗤い方をする時のジンは機嫌がいい。そして、ジンの機嫌をよくするような事柄は、大抵ベルモットを不快にさせた。

そちらを見やれば、ジンはコートのポケットに手を入れ、斜に立って怪盗が消えたはずの川下を眺め……愉快そうに口を歪めていた。「ベルモット。アイツの動きを見たか？ 人間は限界値の数パーセントの身体能力しか通常は引き出せないように出来てる、だのと聞くが……奇術師ってのはそのリミッターを制御することが出来るのかもしれないな。……さすがにオレも、ここまでだとは予測できなかった」

「……………」

なあ、ベルモット——と、体ごと向き直ったジンは嗤う。

「どう思う。全身の関節を亜脱臼程度に繰り返し追い込んで、追い込んで、丁寧に可愛がってやって……解放した後でも継続して痛みと熱に苛まれるように仕込んでやったとしても——あんな風に動けるってことは——……そんなものの痛みの内に入らないということなんだかな？」

「……………」

——……思考に空白が挟まった。

「——なん、ですって……？」

ベルモットは自分の耳を疑った。誰の——いや、いつの……何の話だ、と。

「……ちょっと、ジン——」

「——投与した自白剤だって……まだ抜けていない筈なんだがな」

「自白剤……?」

「ああ、打ったときは一応効いていたぜ? 意識レベルは低下して混濁も見られた。——ただ、その状態でも最後まで一切口を割らなかったわけだが」

「……っ」

(——この男——!)

アジトでキッドを尋問したのか。

そうベルモットは理解すると同時に軽い目眩を覚えた。それは強い怒りによるものであり、対象は目の前の男と、自分自身だった。

キッドが運び込まれてから、医療スタッフが彼の生命維持に関する検診を行った。その結果を聞いていたから、安易に考えていた。『殺すつもりがないなら、これ以上手荒な扱いはすべきではない』と下された判断を取り合わずに、価値ある鳥を損ないかねない行動に出る輩もいないだろうと。

(私が、キッドを逃がすための工作でアジトを出ている間に……)

ベルモットはもはや殺気を隠さずにジンを睨み付けた。

「……そんなに早急に聞き出さなければならなかったの? せっかく生け捕りにしたキッドを殺しかねない真似までして?」

「一応はあったが、どちらかと言えば、それはついでだな」

「……ついで?」

「ああ。どれだけ追いつめても口を割らないだろうという予測はあった。ただ中々面白い奴だったから、もう少し遊んでやろうと興が乗った……それだけだ」

「……相変わらず趣味が最悪ね」

「まあそう言うな」

ベルモットの冷え切った声に、ジンは嗤って言う。

「だが、弱らせておいて正解だったろう? ……どこかの裏切り者が逃亡の手引きをする際の、足枷になればと考えていたわけだが……」

……」

「……………」

「そういう時点で発覚した方が面白そうだったから」見た目の上では”控えめにしておいたものを……まさかあいつ自らが完全に隠し通しやがった上に、足を引っ張るところか手も借りず単身で逃げおせるとは。痛めつけておかなけりゃ、車に乗せる以前に、あの牢から脱出して一暴れくらいしたんじゃないか、あれは」

そう言いながら取り出した煙草を咥えたジンは、ジッポーの火をその先へ移す。

そして、「帰るぞ」と、紫煙を吐き出しながらきびすを返した。

「一度アジトに戻り、それからヤツを追跡する」

その台詞に、ベルモットは片手を腰に当て皮肉げに口の端を上げた。

「この流れに乗ってどこまで移動するかもわからない彼を？」

「ああそうだ。……鳥を野に放つ前には『足輪』を付けておくものだぜ、ベルモット」

「……発信機つてこと？ そんなもの彼は——」

「——すぐに気づいて捨てる……か？」

笑止とばかりに鼻を鳴らしたジンは、その程度のことをオレが考慮しなかったと思うのか、と切り捨てる。

「……………」

「まあ本来なら、逃げた後をそのまま追跡して捕らえてやる予定だったんだが、生憎そうもいかなかった」

まったく一筋縄じゃいかねえ野郎だ、と言ってこちらに背を向けて足を踏み出したジンは——しかし、おもむろに立ち止まった。

「まあもつとも、追跡はともかく捕獲に関しては——……あの状態でこの流れに飛び込んで、アイツが生きて岸に上がっていたらの話だな」

ベルモットは欄干に両手をつき、曇天の下、滔々と流れゆく水に行く先を遠く眺めながら、怪盗が別れにくれた言葉を脳裏に再生した。

彼が言ったジュリアとは、かつてあの人——彼の父である黒羽盗一に世話になっていた頃のベルモットが、よく変装をしていた架空の人物の名だった。幼き頃のあの子供にも、その変装を見せたことがある。まだ、シャロン・ヴィンヤードとして生きていた頃。

（私があのシャロンだとわかったのね。そして、変装でもない不変のこの姿を厭うことなく、信じてくれた）

そのうえ、ジンの謀を悟った彼は、己のためにベルモットが不利になることを嫌い、ベルモットが動く前に、自ら動いたのだ。

——欄干から身を躍らせた若い怪盗の背には、不可視の翼があった。

ジンに卑劣な行為を強いられようと、折れることなく、鳥は翼を失ってはいなかった。

どうか、無事で——。

祈るベルモットの脳裏に、怪盗キッド——黒羽快斗と、もう一人……その彼と面差しの似た別の人物が浮かぶ。

それは、狼の心臓を撃ち貫く銀の弾丸。愛しのシルバーブレット。

（お願い……シルバーブレット——彼を）

弱り果てた、あの白く優しい鳥を、どうか――……。。

（あれ……オレ、いつのまに寝っ転がったんだろ）

ぼんやりとした曖昧な視界が九十度傾いていることに気付いて、内心首を傾げた。

（携帯、は？）

手に持っていたはずのをどうしたんだろうかと思うが、確認しようにも指が僅かに動くだけで、手の中にあるのかもよく判らなかった。

でも、まあいいか、と思って諦める。

出来るだけのことはした。今は少し休んでもいいだろう。

服部平次は苦労人だ。その最たる理由は、彼が苦労人であることを、誰も認識してくれないことだろう。

本人すら自覚がないから、今日も今日とて、彼は苦労を背負い込んでいた。

ようやく東の空が白み始めた薄明のころ。熟睡していた平次の携帯電話を執拗に呼び出し続け、彼を安らかな眠りの園から引きずり

出した相手は、開口一番、電話越しに寝ぼけ眼の平次へこう告げた。

『今すぐこっちに来て。私と博士だけじゃ手に負えないの。熟睡していたようだし、無駄に体力とか余ってるんでしょから役立ててちょうだい。詳しいことは来てから説明するけど、とにかく工藤くんが切れちゃってて、手に負えないのよ。……いい？ ちんたらしでないで、とつと来て。それじゃ』

「……………なんじゃそりゃああ!!」

不通音を繰り返す携帯に向かって雄叫びを上げた平次は、それでも、不機嫌そうに愚痴りながら急いで身支度を整えバイクに跨った。空港から飛行機が一番速いが、懐に痛いのでそれは諦め、平次は一番の新幹線に乗り込むべく、新聞配達と一緒になって早朝の大阪をバイクで走り抜けた。

……………苦勞人である。

「わいはほんま、なにやってるんやろ……………」

平次はテーブルに両手を広げて万歳のポーズで懷きながら、うろんな目で中空を眺めていた。

「ちょっと。——邪魔よ」

「……………」

と、頭上から降る冷たい声が、その平次へと突き刺さる。平次は勢いを付けて椅子にふんぞり返ると、その暴君をジト目で見た。

平次を叩き起こし、ここへ呼びつけた少女——灰原哀、その人を。

——時は、五分ほど遡る。九時を過ぎて阿笠邸にようやく辿り着いた平次を一瞥して、一言「遅いわよ」と言い放った哀は、疲労の溜まった様子でリビングに平次を案内した。——今から朝食にするから一緒に食べましょう、と。

「ちよう待ち！ 工藤が大変だとかどうか、それはどうなったんや！」

わいは新幹線で高い金使って朝食ご馳走になりきたんとちゃうぞ！

そう言った平次に哀は疲れた眼差しを向ける。

「工藤くんは、今眠ってるわ。だからとりあえず放っておいていい」

「なんでわいが眠い目擦って駆けつけとんのに、肝心の工藤がおねんねしとんねん……」

「本当にすまんのう、服部君」

「あなた工藤くんの友達で、数少ない理解者なんだから、そのくらいですらないですよ。……ほら、朝食。お腹すいてるでしょう」

「……………」

平次はテーブルに並べられた遅い朝食メニューを見た。ベーシツクな和食の献立だ。ダイニングから見える場所に頻繁に使われていそうなトースターが見えることや、哀の血筋からして、常ならパンであろうと推測がつく。

「……………いただきます」

平次は両手を合わせ、ありがたく頂くことにした。純和式な服部家のことを慮って用意されたであろう朝食に、一応それなりに気を遣われているのだと機嫌を持ち直したのだ。

平次が到着するのを待っていてくれたのだらう、一緒に遅い朝食の卓についた哀と阿笠に、平次は「で？」と切り出した。未だに語られていない、呼び寄せられた理由についてである。

「結局どういうことなんや。一体何があつたん。今朝、電話掛けてきたときはまだ、工藤は起きてたんか？」

「……ええ。あなたが間に合いそうになかったから、私が麻酔で眠らせた」

その回答に、平次は眉を顰めた。いよいよ穏やかでない話だ。

「工藤が切れた言うてたけど、工藤止めるために麻酔打ったゆうことか。……工藤が一体どうしたんや。昨夜、何があつたゆうんや？」

哀と阿笠が、躊躇うように口を閉ざす。

「……食事が終わったら話すわ。あまり喉の通りが良くなるような話じゃないから」

「工藤くんが言うには——怪盗キッドが、黒の組織に捕まってしまったらしいの」

朝食を終えコーヒーを手に、改めてテーブルに着いた平次を前に哀は初めにそう告げた。

「……はあ？ なん——え？ ……なんやって？」

突拍子もなく、遙かにかき離れた位置にあるはずの二つのものを同時に話題にされて、コーヒーに口を付けようとしていた平次は思わず口を開いて固まった。

「怪盗キッドが……なに、黒の組織？ はあ？ キッドって、あの月下の奇術師、平成のルパン、確保不能の大怪盗か？」

「ええ」

「それが、なんやて？ 黒ずくめの組織に？ ——……はあ！？ 捕まったってどういうこっちゃ！ なんでやつこさんがそんなことになるん！」

哀は平次に、コナンから聞いた話を正確に伝えた。最初こそ取り乱したものの、平次は話を聴くにつれ鋭い顔つきになり、黙って哀

の説明を聞いた。

話がコナンが解毒剤を欲しがったくだりに来て、平次はため息を吐いて頭を掻いた。

「なるほど。確かにそれは切れとんなあ」

「……工藤くん、自分の隠してきたことを全て使って、方々へ働きかけるつもりなのよ。協力を得るために、工藤新一を証明するために、解毒剤で実際に人間が伸び縮みするのを見せるって……無茶苦茶なことやって」

「全面对決っちゅーわけか。……おっそろしいなあ。そんなんうまくいくわけないー言いたいところやけど、なんや工藤が本気でやる気になったんならやり遂げてしまいたいそうないもするから、恐ろしいわ」

「何馬鹿なこといつてるのよ。うまくいくわけ無い。そんなことをしたら結末は見えているわ。みんなが不幸になるだけよ」

本気が冗談か笑う平次を、哀は睨み付ける。

しかし、笑みを消した平次は怯まず、「せやけど——」と、探偵の鋭い目を哀に向けた。

「あてがないんやろ？ 工藤かて、どうにか奴らを追跡できないか、手掛かり探して知恵絞ったはずや。それでも結局そんなこと言い出したっちゅーことは、そうせなああの怪盗を見殺しにすることになるって結論に至ったゆーことや。ねえちゃん、あの工藤が、あれだけ気に入ってるやつこさんを見殺しにして、のうのと生きていけると思うか」

「……怪盗さんは、立派な大人でしょ。私や工藤くんと違って、真正銘ね。自分でなんとかするわよ」

「……………」

「言うなれば、彼は頼んでもいないのに勝手にお節介をやいて、力ツコつけて自分の身の丈以上のことをしようとして、その傲慢が身に返っただけじゃない。自業自得のようなものよ、これは。間抜けよね。かっこわるい。……工藤くんには関係のないことだわ」

「……哀くん」

「……はあ」

平次は肩で息をつく。

「それ。工藤にもそう言っただんか？」

「……言っただわ」

「工藤、なんやて？」

「……『そうだな、確かにそうかもしれない。アイツは本当に大馬鹿野郎だ。……それで？ 灰原はオレをアイツ以下の屑で最低なゴミ野郎にするつもりか』」

服部は手を伸ばして哀の頭を撫でようとしたが、それをはね除けられる。俯いていた哀はキツと顔を上げると剣呑な目つきで服部を睨んだ。役立たず、裏切り者、と罵る。

「私はあなたに工藤くんを止めて貰おうと思って呼んだのよ。期待はずれも甚だしいわ。……馬鹿みたい。あなたも所詮工藤くんの同類なんだったてこと、忘れてたわ」

「……ま、折角当てにされて出向いてきたんや。わいはわいで出来ることをするよって、そうねえちゃんもしよげるなや」

「馬鹿にしないで。しよげてない」

「とりあえずな、あんたも工藤も冷静になる時間がちょっと必要や。……工藤の麻酔はどれくらいで切れるんや？」

哀は時計を見て、目を細めた。

「工藤くん、昨夜は一睡も……いえ、殆ど寝てないし、当分目を覚まさないと思う。酷い緊張と疲労もあつたろうし。……そうね、麻酔の効力的にも、目を覚ますのは十六時以降じゃないかしら」

「……」

今は十時過ぎ。麻酔を打ったのは六時か七時だろう。

「……長いな……. どれだけ強い麻酔打ったんや……」

「……だって、無茶なこと言うから……。大丈夫よ、体に害のある薬を使った訳じゃないから」

半眼で口を引きつらせる平次の言葉に、哀は、取り乱した過去の

自分を反省してか、ばつが悪そうに顔を逸らした。

——やめろ……！！

——そいつに触るなッ！！

力の限り、血を吐くような叫び声を上げているはずなのに、喉からは、一切の声が出ていない。

擦れ声一つ……呼吸音すらも発しない己の喉に耳の方の異常を疑うが、そうではないことは直ぐにわかった。

布の切り裂かれる高い音が、鼓膜を突き抜ける。

夜風で優雅に波打ち、翼の役目も果たすはずの白いマントが、ナイフで切り裂かれる音だった。

白い羽を無惨に切り裂いたナイフ。

それを振るう体格の良い黒服はなおも追いつかり、逃がすものかと、今度は、岩石のような硬い拳——それを握った逞しい腕を鋭く引き締め振り上げる。

——危ねえー！ キッドッ！！

注意を促す声は音に成らず。

砕くような勢いで振り下ろされた黒服の厳つい拳が、避けきれなかった怪盗の血に濡れている肩を、捉える。

重い殴打音。

それと共に短く零れた、聞いたこともない苦痛に満ちた怪盗の声が、耳に届くことが信じられない。暴虐な一撃は、既に満身創痍の怪盗から苦痛の声を引きずり出し、致命的な一時、敵の眼前でその体の制御を停止させることに成功していた。

……耳を塞ぎたい。見たくない。否、今すぐ駆け寄って、黒服を叩きのめしたかった。だが、出来ることと言えば、声にならない叫びを上げることだけ――

――やめろオっ!!

喜色を浮かべた黒服が、怪盗のよろめく体をむんずと掴み荒々しく引き寄せる。黒服は怪盗の両手を片手で後ろ手に戒めて、背後から回した片腕で怪盗の細い首をホルドした。

黒服の逞しい腕に頸動脈を絞められれば、意識は一瞬で墜ちてしまうだろう。最悪、首の骨が折れれば死に至る。

そして、厳つい黒服が勝利を確信した笑みを深くし、腕に力を籠める瞬間――

バツンッ!!

と、腹に響くような音……いや、空気の振動が走った。雷に打たれたように黒服の体が硬直する。

――!! ……よしっ!

その隙に、怪盗が黒服の檻から抜けだした。

形勢が逆転する。

そして、硬直する黒服の延髄を目がけて、固く組んだ両手を、怪盗は渾身の力で叩き込もうとする――

……が。

「……ッ!？」

――つつ……!？」

……怪盗はそれを中断せざるを得ない。

黒い突風が、怪盗に迫る。狼のように疾駆する影は、黒い長身の人影――

怪盗は迷うことなくそれまでの行動を放棄した。咄嗟に後退しながら、厳つい黒服が自分と長身の黒服とを結ぶ線に入ろうと体をずらし、それを盾にする。そうなれば、長身の黒服は厳つい黒服を右か左に避けるコースで怪盗に迫るしかない。少なからず隙が生まれるはずだった。怪盗はそれを迎え撃つ事ができる。

……しかし。

「――ッしまっ……!？」

――……なっ!？」

黒服のリアクションは怪盗の予想を超えたところから襲いかかり、怪盗の一手を逆手にとって、怪盗の方にこそ隙を穿った。

長身の黒服は、厳つい黒服を避けることなどしなかったのだ。それどころか疾走する勢いをそのまま乗せて、ショルダータックルで厳つい黒服を突き飛ばしたのだ。

その先には、怪盗がいる。……怪盗がそう調整したからだ。

怪盗は、勢いよく迫る厳つい黒服の体軀を、横に身を翻してどうにか交わす。だが、その先は――。

負傷した脚で体制を崩しながらも、怪盗はすぐ側へ肉薄した長身の黒服が振り下ろす拳に、ガードを入れる。

長身の黒服が狙ったのは、やはり怪盗の血に濡れた右肩だった。怪盗に、それを右腕以外でガードする余裕はない。

顔を歪める怪盗と、口の端を吊り上げる黒服。

腕から伝わる衝撃が十分に怪盗の肩の負傷に響き渡ったことは、それだけで明白だった。

――やめろ……

よるめいた怪盗の右腕が長身の黒服の手に掴まれ、きつく吊り上げられる。

――やめろ……

息をつく間も無く、長身の黒服の二撃目が、怪盗の左脚目がけて繰り出される。それを阻止しようと動いた怪盗の左手は、しかし、見越したような黒服に逆に掴み上げられ、右腕同様、食い込む指と鉄のような腕に固定され、動きを封じられてしまう。

黒服は、抵抗を奪った上で怪盗に向けて重い一撃を与えるべく、体のバネを存分に使うことを惜しまない。

――やめろ……

振り上げられた黒服の固い膝が、怪盗の血に濡れた左大腿部を強く打つ。出血に染まるスラックスから、赤い飛沫が散る。音にならない、吐息のような声が仰け反る怪盗の咽から漏れる。

——やめろ……っ

両腕を捕らえられ、左膝から力の抜け落ちる既に抵抗の出来ない怪盗に対し、黒服はなおも凶暴な気を漲らせる。

黒服のその半身を捻るようにして溜められた蹴りは鞭のようにしなり……満身創痍な怪盗の無防備な腹部目がけ、うなりを上げて放たれた。

——……やめろおおッッ！！

ドンっ……と、地響きのような低いくぐもった音が、振動として響く。

怪盗の体は、ゆうに五メートル後方まで飛ばされた。

その先で受け身もなく地面にたたきつけられ、勢いのままに地面を転がり——慣性力にただ従うような体はやがて人形のように意思の通わぬ手脚を投げ出して、静止する。

指先一つピクリとも動かない体は、完全に弛緩していた。

——ッッ……キッド——ッ！！

血を吐くように叫んだ。しかし、声帯が震える感覚が無い。

駆け寄りたい。だが、自分の肉体すら認知できず、声すら出ない。声さえも、届かない。

——キッドっ！！

——すっかりしゃがれっ！！ キッド……ッッ！！

あの気障な、いつも冷涼だった白い怪盗が……倒れている。

白い衣装は砂埃で汚れ、数力所が血に濡れている。翼である白いマントは無惨に切り裂かれて散っていた。

横向きに倒れる怪盗の肩を蹴り、長身の黒服が、仰向けにさせたその体を見下ろす。

そして黒服は満足そうに口の端を吊り上げると、その長身を屈み込ませ、手を伸ばした。怪盗の額にかかる前髪を雑に掻き上げて、ひっそりと瞼を落としたその顔を覗き込む。

「……随分と手こずらせてくれたもんだ。あれだけのトラップや奇策を次々繰り出すとは、流石月下の奇術師、といったところか。しかも手負いのくせに、よくもまあ、動きやがる。正直、何度か冷や汗を掻かされた。——だが、そのショーもこれで幕引きだ……怪盗キッド」

「うう……兄貴い、あんまりじゃないですかあ。タツクル、かなり本気だったでしょう」

「阿呆。間抜けなテメーを活躍させてやったんだ。ありがたく思え」

「へ、へい……すいやせん……っ。……ところで兄貴、オレ、体が上手く動かせねえんですが……一体……？ そいつ、オレに何しやがったんですかね？」

「——……これだな。こいつ、腕にスタンガンの電極を仕込んでやがったんだ。丁度さつきみたいに取り押さえられた時に、食らわすためにな。……体を密着して撃つんだから、当然自分も巻き込んで。……脚にも、同じものが仕込んであるな。——ここにも何かある……ふん……なるほど、何が飛び出すか予想がつかんな、こいつの体は」

——触るんじゃ、ねえ……

怪盗の上体を引き起こした黒服の手が、会話をする間にも、腕や脚、背から腰から、怪盗の体のあちこちを取り調べるように撫で回す。

怪盗は黒服の腕に力なくもたれ掛かったまま、されるがまま、抵抗はおろか、ぴくりともしない。

長身の黒服による検分が済むと、今度は厳つい黒服が身を乗り出した。脱力した怪盗の両腕を掴んで背へ回す。そして、今度こそそれを後ろ手にしっかりと戒めていくのだ。

固く冷たい金属音が怪盗の上で鳴る。トリプルチェーンの手錠を施される両手首——、さらに白い手袋の上から指錠を嵌められて、両手の親指が繋がれ封じられる。黒服二人の体軀の間で、白い怪盗が虜囚の姿となる。

ギチギチと音を立てて弛み無く固定された手枷は、僅かにチェーンの音だけを零して。

その光景に、知覚できないはずの背筋が凍り付いた。
まずい……このままでは、と。一気に、悪寒が駆け上る。
このままでは、手の届かないところに——

——やめろオ——！！

衝動的に叫んでいた。

——ちくしょう！！　　なんでっ……おいっ！！　　やめろ——！！

制止の声を叫ぶとも事態は止まらない。

厳つい黒服が、意識の無いぐったりとした体を悠々と肩に担ぎ上

げる。

——よせっ……どこに連れて行く気だ!?

——ふざけんな!! テメーらなんかにそいつを渡してたまるか
よっ!!

——返せ!!!

——おいっ……!! 連れて行くなよっ!! 待て……!!

——……そいつを……っ

——そいつを連れて行くなッ……!!
!!

叫ぶと同時に、目の前の景色が一変する。

薄暗い部屋に、

後ろ手に戒められた、一人の少年が転がされている。衣服があちこち裂けて、その至る所に血が滲んでいる。

虫の息の少年の側には、喪服のようなものを着た人間が立っていて、手に何かをぶら下げている。

それは、見たこともないほど大きな、純白な鳥の翼だった。大きな一对の翼を、片手で驚掴みにしてぶら下げている。

床には、真っ白な羽根が大量に散乱している。

純白の翼をもぎ取ったせいだ。

部屋には、ぐったりとした少年が倒れている。

その青いシャツを纏った背中が——真っ赤に染まっていた。

新一は、

彼の名を叫んだ。

しかし、血の滲むようなその叫びも、やはり声にはならなかった。

——そして——……

『いいかげんにしなさいよ工藤くん!!』

「あちゃあ……」

平次は、コンビニから帰って玄関の扉を開けた途端聞こえてきた怒声に溜め息を吐き、急いで靴を脱ぐと声の元へ走った。

（読みがちよつと甘かったやないか、ねえちゃん）

予測は十六時前後。時刻はまだ、十五時にも数分の猶予を残していた。

「服部……なんでおめえが……灰原に呼ばれたのか」

リビングへ走り込めば、コナンが片眉を上げて平次を見た。

平次はそれに片手を上げて応える。

「よお、久しぶり。なんや修羅場やつちゅーことで呼ばれてきたんで？ と、近くで途方に暮れたように立ち尽くしている阿笠に、平次は問いかけた。

「どういう状況や？ 相変わらずの押し問答してんのんか？」

「……新一が、いつの間にか目を覚ましていてのう。こっそり哀くんの研究室に忍び込んで解毒薬を探しておったんじゃ。それに哀く

んが気付いて……この状況じゃ」

「ふうん。……工藤、解毒薬は見つかったんか？」

「ああ。手に入れた。探偵なんだからそのくらい推理出来なきゃな」
「……っ、工藤くん、本当にいい加減にして。そんなことしようとするなんて、気が狂れたの？ あなたの周りの人、みんなが不幸になるわよ」

「くどいぜ灰原。お前こそいい加減に解れよ。……オレは十分お前の気持ちは分かってるつもりだから」

「ふざけないでよ。あなたに私の何が分かるのよ」

「……………だったら、灰原。お前に、俺の気持ちは分かるか？」

「！」

不意に、声のトーンを落としたコナンの身体から、濃厚な威圧と切るような空気があふれ出した。解放した、と言った方が正確なのだろう。今まで彼はそれを押さえていたのだと、哀は気付いた。

いつもの伊達眼鏡を掛けていない彼は、深沈と底の知れない瞳で静かに問う。

それはもはや江戸川コナンではなかった。

新一は、哀を見ずに言う。冷気が足下から上がってくるような淡々とした声で。

「お前は、当然オレのことを思って、馬鹿なオレを止めるためにやったんだろうな……。だけど、目を覚まして、何時間も平和にのうと眠りこけてた自分を知った時の、さっきのオレの気持ちは分かるか、灰原。——昨夜と同じ絶望をもう一度味わったオレの気持ち……わかるのかよ、灰原」

「……おい、工藤」

変質し始めた空気に顔を顰め、平次は嗜めるように新一を呼ぶ。不用意に哀を攻撃するようなことはないだろうが、どうしても必要なら刀を振るってしまいうような剣呑さが、今の新一にはあった。

曇天の午後、薄暗いリビングで四人の人間が押し黙る。

（冗談じゃなく、修羅場やな……）

助けを求めるような阿笠の視線にも押され、しゃーないなあと平次は一步進み出た。今は第三者として冷静な判断を提示する人間が必要で、平次の役目はそれだった。

「まあ、とりあえず、早急に結論ださなくてもええんやないか？」

その言葉に哀が瞠目して振り返り、新一がスツと眼光を鋭くする。

「……オレは早急に動きてえんだよ」

「ま、言うこともわかるけどな。だけど、もうちょっと慎重に様子を見てもええと思うで。ねえちゃんから話は聞いたけど、実際キツドが連れ去られるの、見たわけやないんやろ？ そう思わせるだけの状況やって、お前が言うならそうかもしれないけど、まだ結論を出すのは早いんやないやろか。無事にねぐらに帰ってるって可能性も低くないと思うで」

「……………」

「これが一つめ。さらにもう一個、仮に連れ去られていたとしても、やつこさんが、自力でなんとかする可能性は高いんやないかつちゅーことや。……お前は何度も対決してるから親近感みたいなもんもつとるんかもしれないけど、やつこさんは、その道のプロやで。裏の世界の人間や。十八年も前からその道で生きてきて、たぶんオレらより二十も歳が上やろ。蛇の道は蛇。一般人のヒヨつこの助けを欲しがるとは思えんで」

「私もそう思う」

同調して哀が訴える。

「昨日も言っただけど、怪盗さんは、きつと自力でどうにかするに違いないわよ。月下の奇術師、確保不能の大怪盗なんだから。きつとそのうち予告状がどこかに届いて、ひょっこり姿を現すんじゃない？ 彼は神出鬼没のファントム……でしょ？」

「……………」

「だから、あなたがそんなに気を回す必要はないわ。放っておいても——」

哀の台詞が終わらないうちに、大きく溜め息を吐いた新一は哀の脇をすり抜けた。

「ちよつと!」

「——わかった」

新一のその言葉に、掴みかかろうとした手を思わず止めて哀は目を睜った。行く背を見送ってしまう。

「……何がわかったんや、工藤」

戸口にもたれてる平次は、目の前に来た新一へ鋭く問う。

新一は自嘲するように口を歪めた。

「よく分かったよ。オレが、甘かったってことが……お前らがそんな風に考えるくらいだから、他の連中もそうなのかもな。たとえ工藤新一として協力を得ても、未知な薬物の解明や犯罪組織の壊滅に関して興味を示すばかりで、たった一人の犯罪者の安否なんて誰もとりあわねえってことか。あの神出鬼没の怪盗なら巧くやってる……とか言ってな」

ハッ! と、片腹痛いとばかりに新一は嗤う。

「工藤」

「工藤く——」

「新一……」

三人は動けなかった。新一の押し殺されていた強い怒りが露出して押し寄せ、あてられた肌が粟立つ。

「アイツのこと実態のないファントムだとか、本気で思ってたのか。残念ながらアイツは血の通った人間だよ。馬鹿で、お人好しで、お節介な。……強い意志と信念を持った、ただの人間だ。種も仕掛けもある箱の中で串刺しにされても死なねえだろうが……、種も仕掛けもなく拳銃で撃たれば血を流すし、血を流しすぎれば死ぬんだよ!」

平次が伸ばした手を新一は払いのける。

「どけ！！ 服部ッ！！」

「……っ、おちつけや工藤！！」

「——ッ……同じだっつーんだよッ！！」

——裏の世界の人間？

——十八年も前からその道で生きてる？

……幻影だと？

「放っておけるかよ！！ アイツは！ アイツはオレの——！」

新一が、そう言いかけたその瞬間。

けたたましい電子音が唐突に鳴り響いた。

コナンは、転がるように玄関から飛び出した。

空を見上げ、首を巡らせる。後を追って来た、物問いたげな平次たちを「黙ってる！」の一言で押しとどめ、目をこらし、耳を澄ませる。

（――来た！）

遠くから届く轟々という音がこちらに近づいてくるのを耳に捉え、コナンはそちらを振り仰ぐ。

曇天であるが、着陸に備え高度を下けているそれは雲の下を飛行している。

ジャンボジェット機である。

（……39……40……41……42……）

見えてきた機体の飛来する方角を正確に把握しつつ、カウントを続けていく。

機体がちょうど頭上に来たのを46で数え、コナンは腕時計を持ち上げた。が、たれ込める雲に太陽が隠されていることに気づく。

「博士、方位磁石と都内の地図！ それとペンと定規も！」

言い渡した物を阿笠が集めてくるのをじっと動かずに待っていたコナンは、受け取るなりその場に座り込んでそれらを広げた。

記憶しておいた飛行機の飛来方向と、都内一円の描かれた地図とをコンパスで照らし合わせ、線を引く。

起点は米花町二丁目22番地……つまりコナンが座り込んでいる阿笠邸の前だった。そこから、西南に線を引いていく。それが地図の上で川にぶつかったところで、コナンはペンを止めた。
すかさず距離を測る。

「23・6センチ……5万分の1だから、11・8キロメートルか」
口に出しつつ、その数字を地図の余白に書き込む。
平次、哀、阿笠は、口を挟めずにそれを見守る。

「飛行機がここまで到達するのに46秒。……時速1000キロメートルで飛行していたと想定すると、43秒。着陸に向けて高度と速度を落としていたはずだから……誤差の範囲内だな」
引いた線がぶつかった川近辺を丸で囲む。

「博士！ 大至急車出してくれ！！」
「……へ、あ、うむっ、わかった！」

鍵を取りに再び家へ駆け込んだ阿笠を見送って、ようやく平次と哀はコナンの視界へと進み出た。

だが二人が口を開くより先にコナンが言う。

「悪いけど、二人も一緒に来てくれ。……灰原、簡単に応急手当ができるもの用意していつてくれ」

「……わかったわ」

言葉の先をとられ、そう答えるしかない哀はその準備のために家へ向かう。それを見送って、平次は車庫へ向かうコナンの後を追った。

「やつこさんの居場所、わかったんか」

「ああ。詳しくはみんなの前で説明する」

「……なるほど。電話の向こうで、やつこさんの居る場所をあの飛行機が通過するのんが聞こえたうちうことか」

キッドが居るらしき場所と阿笠邸の場所とを繋ぐラインと、その

飛行機の航路とが運良く一致して、簡単に距離と方角が割り出せた。「概略だけだな」とコナンは眉を顰める。

車に乗り込み阿笠に行く先を告げると、コナンは先ほど丸を付けた箇所、より詳細な地図を睨み付けながら三人に説明をしたのだ。得られた情報と、推理を。

「あとは、水音が聞こえたから川の近くだって事。昨日まで山の方で強い雨があつたせいで増水してるからな。……やっぱりこれか」「なんや？」

地図を睨んでいるコナンがもう一度丸を描くのを、後部座席から平次が覗き込む。

「公園だ。……時計の時報も聞こえた。このあたりの川辺には時報を打つ時計を置いてそんな施設は他にない」

「……ねえ、もうここまで来てしまつて言つのもなんだけど、怪盗さん、すごく元気そうじゃなかった？」

あなたの通話、私も側で聞かせてもらったけど……と哀がシートにもたれたまま、少し不機嫌そうに言う。

あの時、コナンの携帯電話へかかってきた電話。非通知の表示を見るなり顔色を変えたコナンは、かじりつくようにその電話へ出た。そして出るなり「キッドか!? 今どこにいる!」と怒鳴つたのだ。

それを聞いてすかさず哀と平次はコナンへ寄つて耳をそばだてた。ちなみに阿笠は出遅れたので怪盗の声を聴いていない。

電話の向こうの怪盗は、いつそ腹立たしいほどいつも通り飄々として人を食つた物言いをした。

どこにいるのかとコナンが問えば、「怪盗が探偵に居場所を素直に教えたりすると思うか？」と笑い、

「そういえば探偵くんはちゃんと家に帰れたのかな? とふと思いつ出したんで様子伺いに電話してみたぜ。ちなみになんで携帯番号知ってるのかはヒミツ。昨夜はオレも疲れたから、お前放置して家に

帰っちゃったけど……もしかして怒ってたりするか？ ロッカーに詰めたしな」と、あっけらかんと言ったのだ。

それに対して、コナンは鋭い目つきのままで「ちゃんと最後までケアしろ」とか軽口を叩いたあと、嫌みを混ぜつつ一応の感謝を告げ、電話を切ったのだ。……そのあと、靴も履かずに弾丸のように家の外へ飛び出したのだが。

「怪盗さんが組織に捕まったというのは、結局思い過ごしだったわけでしょ？ ……そりゃ、怪盗さんの怪我は心配だけど、住処に一度帰ってるんだし、きちんと治療もしてるはずじゃないの？」

正直ちよつと過保護というか、気にしすぎだと哀は思う。怪盗は強い。助けられるのはいつもこちら側で、あの奇術師がこちらの助けを必要とする事態というのは、想像が出来なかった。

「……オレがあのとときキッドの話に調子を合わせたのは、アイツがオレを用心して万が一場所を移動するのを防ぐためだ」

コナンが重い溜め息を吐く。

「灰原……アイツはな。筋金入りの大嘘つきなんだよ」

公園の片隅に管理用の小屋を見つけ、駆け寄ったコナンは伸び上がってドアノブを回した。だが、体重を掛けて引いてもドアはびくともしない。

「……………」

コナンは眉を顰めて視線を強くする。追いついた平次が、代わってノブに手を伸ばした。

「鍵がかかるとるんか？ んなら、ここは違うんと——」

そう言いながらノブを握って回し引くが、やはりドアは微動もし

ない。

「……んん？」

その手応えに平次もまた、不審そうに目を細めた。何度か扉を押し引きする。コナンが、腕時計のライトを点けて、それをドアの隙間にあてる。

「妙やな……このタイプのドアは、ロック掛けてあつてドアを開けようとしたら、もっとガタガタ言わんか、普通。こんなにびっちりビクともしないなんておかしいで」

「ああ」

コナンは、取っ手のある高さの隙間に光を当てる。

「……やっぱりだぜ。デッドボルトが落ちてねえ」

「つつーことは、この扉は鍵で閉ざされているわけや無い……」

「こういう倉庫なんかには付けられるインテグラルロックのドアノブは、外側はシリンダー付きで、内側はプレインノブの場合が多い。

……だから、鍵ではないもので閉ざすしかない——内側からは」

「つまり、中には人がおるつちゅーわけやな」

「ああ。手先の器用な不法侵入者がな。——……窓は？」

小屋の裏手に回ると、平次の胸の高さ……コナンの頭より上の高さに窓が取り付けられていた。

型ガラスの嵌ったそれは、コナンが阿笠に用意させておいたガムテープとボールを使って、平次によつてものの数秒で破られた。開いた穴から手を入れクレセント錠を解除し、窓は軽やかに開け放たれる。

人気がない公園で良かった、と、窓から侵入する面々を見送って、阿笠は溜め息をついた。

平次に持ち上げられてコナンがまず侵入し、その後から平次、そして阿笠の手を借りた哀が窓枠を越えた。

薄暗い倉庫内へ一番に降り立ったコナンは、奥の方の、入り口から死角になっているスペースに倒れている人影を見つけ駆け寄った。

平次、哀もそれに続く。

平次と哀は、その人物を見下ろして息をのんだ。

「——だ……誰やねん、これ」

「こいつが怪盗キッドだよ」

「ッ……この人が!？」

——若い。体を丸めるようにして床に手足を投げ出し意識を失っているその人物は、どう見ても未成年の少年と言っていていい年頃だった。

濃い紫のパーカーにベージュのカーゴパンツ、足は素足にスニーカー。ゆったりとした服を着ているせいで幼い印象すら与えられるその姿は、どこをどう間違っても、四十歳前後になど見えない。

迷い無くその彼をキッドだと断言したコナンは、その頬に触れ、額に手を当て、顔を歪めた。

「くそっ……ひでえ熱だな……っ、どうしてこの状態で素直にオレを呼べねえんだよ、お前は!——」

憤慨して罵声を浴びせつつ、腕を慎重に持ち上げたりして、状態を確かめる。

（服、着替えたばかりって感じだな……だけど髪が濡れてるし、服も湿ってる）

左上腕に血が滲んでいる他に、左脚にも、微かだが紅い染みが出てきている。コナンはパークアのジッパーを引いて、中を覗き込んだ。パークアの下は何も着ていない。腹部を染める痣と火傷のような痕に顔を顰めるが、大きな外傷が見あたらないことと、右肩に止血程度であるが一応の処置がしてあることを確かめて、元のようにジッパーを上げる。

「服部! 車に運んでくれ!」

「——お、おう!」

コナンの鋭い呼びかけに硬直を解いた平次が、キッドだという人物の側へ慌てて屈み込む。

哀もまたその後ろに控えながら、表情を改めた。キッドの正体が自分の本来の歳と変わらないような人物だというのは未だに信じがたい。だが、なんにしろ、真っ青な顔で、浅い呼吸を溺れたように繰り返す彼をこんな場所で寝かせておいて良いわけがない。

「右肩と、左大腿部を怪我してる。傷めないようにな」

「了解や——って……ほんまにひどい熱やな……。まずいんちゃうか、これ」

コナンの忠告に頷き、肩を抱き上げるようにしてぐったりとした上体を持ち上げた平次が、低く唸るように言う。厳しい表情で腕の中の少年を見詰めた平次は、前髪をかき上げるようにして彼の額に手を当て、さらに温度を確かめるように頬や首の素肌に触れる。

「……こういうやつなんだよ、こいつは。……お前も、あの電話の声、聴いただろ？ この状態でああいうことしようとするし、出来ちまうのさ」

言いながらコナンは、横向きに平次に寄りかからせた少年の、その平次側になる左腕を持ち上げて平次の肩に掛けた。

「……がんばるんやで」

平次はくたりと自分に預けられた頭を一度撫で、片手は背を抱くように、もう片腕は膝の裏から両脚を支えるように姿勢を整える。

——その時、

「——……う……」

と、少年が微かに呻いた声が、平次と、側にいたコナンの耳へ滑り込んだ。

二人は息を吞んで彼の顔を凝視した。瞼が微かに震えている。

「キッド……！」

思わずコナンは顔を寄せ、呼びかけた。その声に引かれたように、うつすらと瞼が持ち上がる。

僅かに覗いた、熱で潤んだ青い双眸。それが焦点を漂わせるよう

に揺れる。力なく、虚ろを掴むばかりのような眼差し。

だが、それでも。

口からは、応えて彼を呼ぶ声がこぼれ落ちた。

「……………め……………たんで……………」

辛い息の下で、確かに彼はそう言ったのだった。

一瞬だけ意識を取り戻したキッドは、あつと言う間もなくすぐにまた意識を失った。

その彼を車へ運んで後部座席に寝かせ、シートを一杯まで前に出した助手席には平次が座り、コナンと哀は、後部座席の足元スペースへ乗り込んだ。

そして、ビートルがアクセルを唸らせて、一路阿笠邸へ向け走り出してから、数分後。

「つ……………な、———なんや工藤！　どないしたんや！」

揃って肩を跳ね上げた三人を代表して、平次が声を上げた。

ドン、と車体を震わすほどの強さで、コナンが後部座席の背もたれに拳の底を叩きつけていた。

顔を伏せ、肩を怒らせていたコナンは、大きく息を吐くとその激情をフツと鎮めて力を抜いた。

そして、

「……灰原、これ、治療してやってくれ」

「っ……、これって……！」

コナンが差し出したのは、パーカーの袖を捲り上げたキッドの右手だった。

それを目にして、哀と平次は息を呑んだ。

手首の周囲の肌が赤く染まり、擦り切れて爛れるように腫れ上がっている。ぐると輪を描く傷。

それは、まるで――

「こっちもだろうな……。頼む」

そう言つてキッドの左手をとったコナンが、キッドのその掌の半ばまでを隠している袖をするりと捲り上げれば、そこには右手と同じように赤くに腫れ上がった手首が現れる。

「……手枷掛けられて、拘束されとった痕……。やな」

それを睨み付けながら平次が硬い声で呟けば、絶句し硬直していた哀の体が、怖気に襲われたようにわなないた。何かを押しとどめるように両手で口を塞いだその顔色が、血の気を失い蒼白になる。

「そ、んな……。じゃあ、本当に組織に……。！？」

「……………」

平次は鋭く目を細める。あの組織に囚われていた……。その事実でショックを受けた哀は、しかし、気づけなかったのだ。

『手枷を掛けられていたというのに、それを無茶に動かして随分と傷めている』――その意味。

「……………」

先ほどコナンが激昂した理由を、平次もまた、傷ついた怪盗の手首を見たことで正確に酌み取っていた。

そして思う。

なるほど、これは腹が立つ——と。

（……オレらの怪盗に、随分と舐めた真似してくれよったよなあ。
なあ、工藤）

探偵の胸を熱くする怪盗紳士——月下の奇術師に、無粋な外野が
手枷をかけるだけでも許し難いのに。

手首の傷痕自体も許せない——……だが、その奥にあるものこそ
が一番感情を逆撫でていく。

平次の認識するところの怪盗は、冷静で、賢明な人物である。ス
マートで、無駄が無く、そつがない。

その彼が、手枷を掛けられた手をこんな風に傷めるとしたら、そ
れは一体どういう状況だろう。

そこまで瞬時に思い至ってしまうから、平次は探偵なんてものを
やっている。

理性の制御を外れて、無意識に拘束された手を取り戻そうとして
しまうほど、彼を追いつめる行為をした者がいるのだ。

この年若い怪盗を思っさま黽ったそいつは、どんな表情で彼を眺
めたのだろうか。

5-3 (後書き)

2011・09・01 現在公開可能なストックは以上で終了です。

色々な意味で濃いこの作品を、ここまで読んでくださったあなた様に感謝です。少しでも楽しんで頂けたことを祈るばかりです。

以降の更新分は、これから七転八倒して書くことになるのでかなりのスローペースが予想されますが、もし更新されているのを見かけましたら、また読んでやってくださると幸いです。

まだ未完結ですが、現時点での感想・指摘などありましたら頂けると、う……うれしいです(´、`、) 小心なのでどんな風を受け止めて貰えたのか気になるのです……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1872w/>

SECOND GAME 漆黒の狼、白き月

2011年9月20日15時29分発行